
魔術医師 ジーク

ゆりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術医師 ジーク

【Nコード】

N7367N

【作者名】

ゆりか

【あらすじ】

はるか昔、人が皆魔法を使えた時代

南の大陸では魔大戦が勃発

これは魔術医師ジークの奮闘を描いた書き物である

プロローグ（前書き）

不適切な発言が多数ありますが容赦下さい。
よろしく願います。

主な登場人物

ジーク…主人公 オータム…助手 ロス…ジークの弟

その他の魔術医師…ザックス、ガラ、バラ、モズ、イリア

その他の助手…アリー、リース、サリー

弟子…サシャ ン、チャ、サシャ

プロローグ

「イク先生…ジーク先生！」

助手の声にジークはハッと目覚めた。

「うるさいな！寝かせてくれよ！」

「ダメですよ！15分だけって言ったでしょ！！また、患者の列ができていますよ！」

「もーいいよ！みんな死ね！死ねばいいんだ！」

「あなた…医者でしょ！医者がそんなこと言うなー！」

助手のオータムから強烈なビンタが飛んだ。

「な…殴ったな！この俺を！！1日21時間休み無しで働いているこの俺を！！」

「あなただけじゃありません！助手の私たちだって休みなしじゃないですか！」

「嘘つけ！お前たち助手は3人いて1か月に1日休んでんじゃねーか！しかも1日18時間だし！！俺が知らないと思ったら大間違いだぞ！」

「医師があなた以外みんな逃げたんだからしょうがないじゃないですか！それにこっちは患者には迷惑かけていません」

「ウウツ…なんでこんなことに…何時になったら戦争終わるんだ！誰か教えてくれー！！」

「はいはい…もう患者呼びますよ！次の方ー！」

「ま…待ってくれ…うわー来た！」

魔術医師ジークの苦闘は続く…

限界の限界の限界を超えて

「せ、先生！クラナツク地方で大合戦があつて、1500人の患者がこちらに向かつているそうです。」

「…おい！どーすんだよ！？そんなの俺一人どーにかできるわけないだろ！！」

「そんなの…やるしかないじゃないですか！！」

「お前！俺が死ぬわ！！」

その時、ドアが開き患者がなだれ込んできた。

「ええい！やつたるわ！とりあえず重症患者だけ連れてこんかい！」

36時間後：

「次！あと、何人だ！？」

「今500人目です！」

「ご…まだ500人か！？1200人ぐらいは見ただろ！？」

「いえ！むしろ10人くらいサバよんで500人です。」

「なんなんだー！もう皆死んじやえばいいじゃん！！なんで戦争なんかするんだー！」

その時、助手から強烈なビンタが飛んで来た。

「被災者たちに向かつてなんてことを言うんだー！」

「な…殴ったな！36時間休みなしで働いているこの俺を！」

「あんたがいなきゃ皆死ぬんだからしょうがないじゃない！死んでも働きなさい！！」

72時間後：

「もう嫌だー！！」

ジークは治療中にもかかわらず、突然叫びドアの方に走り出した。それを助手2人（一人は仮眠中）は手慣れた感じで羽交い絞めにした。

「あと300人じゃないですか！？あなたがいなければ死んじゃうんですよ！！」

「もう寝たい！俺は寝たいだけなんだ！なんで俺だけ…なんで俺だけこんなめに！！」

「あなたは魔術医療の大天才だからでしょう！…聞いてください。絶大な魔法力、天才的な判断力、膨大な知識、経験…全てが備わっているあなたしかできないことです。それを誇りに思っただけで最後までやり遂げなさい！」

「ぬあー！！次のやつはとりあえず一発殴るからなー！次！！」

「次はナーヒちゃん5歳です！」

「があー！大人の男連れてこいやー！こんな可愛い子殴れるわけないだろうが！！」

「ナーヒちゃん怯えてるじゃないですか！早く魔法をかけなさい！」

96時間後…

「ジーン先生…あと、あと10人です！」

「誰か、誰か俺を殺してくれ！」

助手から鉄拳が飛んで来た。

「しっかりしろー！」

「そいつら、4日前から死んでないんだろ！じゃあもう大丈夫だろ！」

「私たちが魔法で出血を抑えてるからでしょ！…ってか知ってるでしょ！！あと10人だからごちゃごちゃ言わずに働きなさい。」

「…もう魔法力も気力も判断力も出てこないよ…本当だよ…誰か助けてよ…」

「しかたない…これはやりたくなかったけど…」
「…嫌だ！それだけはやめてくれ！？いつ嫌だー…」

100時間後

「ジーン先生！全員終わりました。」

「…」

「先生？…力尽きて寝てる。…本当に凄い先生だね。1500人休みなく全ての人を救うなんて…」

「そうね…そして私たちも今回はよくやったわね。さあ寝ましょうか。」

「寝かせてくれー！もう寝かせてくれー！」

「ジーン先生、寝ながら治療してる…」

魔術医師ジーンの苦闘は続く

恋来い恋

「次だ！次連れてこい！！」

魔術医師ジークはいつもの通り、乱暴な口調で治療していた。

「次の患者が今日は最後ですよ。ラーマさん女性23歳です。顔を火傷してしまっています。」

そして、患者のラーマが診療室に入ってきた。

初対面で、ジークは瞳がきれいな人だなと思った。

そして火傷を見て、呪文を唱え始めた。

すると皮膚が素早く再生していき、非常にきれいな顔に戻った。

ジークは、そのラーマの顔を見るとドキドキして顔が真っ赤になった。

ラーマは鏡を見て、涙を流しながら言った。

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

ジークは照れながら言った。

「い…いや医者として当然のことだよ。と、ところで明日の最後に診察をもう一回したいんだが構わないかな？」

「は、はい。それはもちろん…しかし、先生はほとんど1回の治療で完治させて2回はなかなかないと伺いました。私はもしかしたら重大な病気なのでしょうか？」

「いや！決してそんなことは…念には念を入れてね。女性の顔は治療し慣れてなくて後で顔に跡でも残ったら大変だしね！あはは…」

「そういうことなんです。患者の数も相当だと聞いています。それなのにそんな風に細かく気遣って下さって…尊敬いたします。」

「いやー、医者として当然の責任だよ。」

助手のオータムがこの一連の会話を聞き、笑顔でジーク囁いた。

「堂々と職権乱用するなんていい度胸していますね。」

「な…なにを言っているんだ…ところで君達助手は明日は来なくても大丈夫だよ。」

「えっ！本当にいいんですか！？」

「ああ！本当さ。たまには君たちも外でデートしてくるといい。いい若い女性が青春を無駄にしちやいかんよ。」

「ありがとうございます！みんなにも伝えてきますね。」

オータムは嬉しそうに走って行った。

ジークはこう考えていた。

「よし、買収成功！これで助手は黙らせた。助手なしじゃ明日はきついがこれを取り切れば二人きりでご飯でも……」

翌日：

「次の人！入ってきて……なに！歩けない！？ああもう……」

助手がいないので予定の3分の1もはかどらない。

これはマズイ……ジークは涙目になりながら、治療した患者にオータムを連れてくるよう言った。

オータムすぐに駆けつけてくれた。そして、ため息をついて言った。
「なんなんですか！？あなたは……！……まあ予想はしていましたけど……」

「うるさい！うるさい！……俺だって恋ぐらいしたいよ！1日22時間休みなしで患者の命救ってんだ！好きな女とご飯に行きたいと思うのは罪ですか！？当然の権利だろ……」

「はあ……わかりましたよ。診察では私は席を外しますよ。だからそれまではしつかりやって下さいよ！」

「え！本当に！？わかった！よしやったるでー！！」

それから、2倍くらいの速さで診察を終え、残るはあと二人になった。

その時、もう一人の助手サリーが走ってきた。

「せ、先生、シグタル平地で合戦があり、100名の患者がこっちに向かっています。」

「そ……そんな！せっかくここまで頑張ったのに……」

オータムがため息をついて言った。

「次！ラーマさん順番変えて申し訳ないけど来てくださーい！」

「オータム！お前はなんていいやつなんだ…」

「…5分だけですよ！男なんだから堂々と交際申し込むならしなさいよ。」

そして、ラーマが入ってきた。

ラーマの顔を見るとそれだけで元気が出た。

「い…いかん！ここでフラれたら絶対あと100人はこなせない！-
ジークはそう思い、言葉を押し殺した。

帰り際、ラーマはジークに向かって言った。

「先生…また時間がある時にご飯でも食べに来ませんか？」

魔術医師ジークはたまには恋もする

そうだ弟子をとろう

「弟子欲しいな…」

「ジーン先生…いきなりなんですか？」

「よし！弟子を募集しよう！！」

「また…無駄なことを。」

「無駄なことなんかあるもんか！君らみたいに助手じゃなく俺のよ
うな魔術医師を目指す優秀な弟子を育てるぞ！そして…そしてこの
地獄から脱出してラーマさんと…」

「…まあやってみたらいいんじゃないですか？どうせ無理だと思うけ
ど…」

さつそくジークは広報活動を開始した。

さすがに、伝説の魔術医師と評判が高いだけあって瞬く間に30人、
腕利きの魔法使いたちがやって来た。

「ほらほらほら、集まって来たでしょーが！さて…早速授業に入る。
とは言っても教える時間はまったくない。私が実際に治療するので、
それを見て勉強なさい。」

修行初日

早速、300人ぐらいが立て続けに来て、ジークはどんどん治療を
行っていた。

有能な魔法使いでも1日に10回魔法を使えば、足腰が立たなくな
る。

それをジークは1日に3,000回唱える。場合によってはそれ以
上…

3人の魔法使いは余りのジークの凄さに圧倒され、別の道を志した
ようだった。

残り27人…

修行10日目

「オータム…いつの間にか弟子も15人になっているんだが…俺の教え方が悪いのかな…」

「いや、テラツサ地方の大合戦で2000人の患者が来たじゃないですか…そして、先生の発狂した様子を見てたじゃないですか…さらに、私が先生のことボコボコに殴ったじゃないですか…終いには拘束して無理やり治療させたじゃないですか…多分その光景を見たら誰もやりたくなくなりますけどね。」

「…皆！この一週間に起こったことはそうあることじゃないぞ！1か月に1回あるかないかだからな。」

ジークのその言葉を聞き、1か月に1回あの地獄があるとわかった弟子3人が違う道を志した。

残り12人…

修行1か月目

「君達2人は、1か月間俺によくついてきてくれた。その…この1か月は特にひどかったんだ。あの後また、でかい合戦が2度あっただろ！？1か月に3度の大合戦はなかなかないんだ！半年に1回あるかないかなんだ！」

「ジーク先生…彼ら疲弊しきって寝ています。」

「あとは、最終試験を残すのみだな…」

「最終試験？」

「10日後に…その…俺抜きで治療を行う！もちろん通常の日だ。そこで1日…いや半日こなせれば…晴れて一人前の魔術医師の証よ！」

「…その日はどこに？」

「いや…その…あつ！たまたまその日はラーマさんと食事に行く日だった！いやー偶然だけどちょうどいいやな…あはは…」

「はーあ…」

残り2人

修行1か月と10日

「お帰りなさい…どうでした？患者さんを置いての食事は？」

「…まあ…そう棘ある言い方すんなよ。二人は？」

「疲弊しきってますよ！二人とも限界を超えてよく頑張ってくれました。」

「…顔面がボコボコだけど…」

「しぼりだしてもらわないと患者の命に関わりますから！」

「…鬼…」

翌日二人に魔術医師認定章を渡した。（魔術医師は実力を認めた弟子にのみ認定証を渡せる）

二人ともどこことなくオータムを恐れていた。（彼女が手を振り上げたらビクツと体が反応していた）

その次の日、その一人から旅に出るので探さないでくださいと置手紙が置いてあった。

残り1人

修行3カ月目

「アッサムはよく続けてくれているな…お前は最高の弟子だ…」
ジークは涙ながらにそう言った。

「せ…先生…もう寝かせてください…げ…限界です。」

「し…しっかりしろ！！寝るとまたオータムにボコボコにされるぞ
！」

「ひ…ひーいん」

「泣くな！こんな大合戦は中々ないんだ！！4000人の患者は俺も経験したことが…5回しかない。」

「もう限界です！先生！俺を殺してください！！」

「誰が可愛いお前を殺すんだ！お前も恋をすればそんな気はなくなるぞ。生きる希望をなんとか見出すんだ！」

「先生！間もなく患者500人到着します！！」

「もう少し…もう少し休ませてやってくれ！俺が俺がその分頑張るから！！」

「せ…せんせええ…」

残り一人

修行3カ月と6日目（3520人の治療完了）

「あ…アッサム！頼む！頼むから殺してくれー！もう嫌だ！患者なんか皆死ねばいいんだー！！」

「先生…アッサムはもういません…さすがに限界の限界の限界が来ました。あなたが、あれ以上やらせたら精神に異常をきたすと判断

したじゃないですか…」

「嘘だ嘘だ嘘だ！アッサム！戻ってきてくれー！！！！俺を…俺を殺してくれー！！」

「ふう…しかたない…あれはやりたくないのだけれど…」

「いやだいやだいやだ！あれだけは勘弁してくれー！！たの…」

残り0人

「とうとう誰もいなくなっちゃったな…」

「ジーク先生…そう肩を落とさないでくださいよ。」

「いや…アッサムという最高の弟子に巡り合えたんだから俺は悔いはないよ。」

「…彼も素晴らしい才能の持ち主でしたね。」

アッサムはその後魔術医師として北の方で活躍することになる。

魔術医師ジークの苦闘は続く

趣味を見つけよう

「……」

「ジーク先生！どうしたんですか？真面目に何か考えているみたいですけど……」

「いや……どうしたら日常が楽しくなるかって思ってた……」

「なんだそんなことか……仕事してくださいよ！」

「毎日が楽しくないのに仕事なんかやる気がするわけないだろ……！」

「……じゃあ何か趣味でも見つければいいんじゃないですか？」

「趣味か！それだ……！……オータム何かある？」

「えっ！私ですか！？えーっ……と……歌が結構好きでよく歌ってますけどね。」

「ちよつと歌ってみてよ。」

「えっ！えっ！なななんで私が歌わなくちゃいけないんですか！？」
他の助手たちも聞き耳を立てていたが、この一連の会話を聞き、こちらへ来た。

「私たちもオータムの歌聞きたいなー！」

「えー！何よあなたたちも！？」

患者たちのマドンナであるオータムが歌うと聞き、患者が続々と集まりだした。

「わし達もオータムちゃんの歌声が聞きたいのー！」

「なんなんですか！？患者さん達まで！」

「ダメなの？」

この無邪気な言葉にオータムはジークを睨みつけたが、外野が信じられないくらい盛り上がっていてもう後には引けなかった。

「……えーじゃあ歌わせて頂きます。」

外野から歓声が湧き、拍手が起きた。

「レオナルドラックスの『ラブリーベイベ』で……ラブリーラブリー

ラブリーベイベ！ラブリーラブリーラブリーベイベ…」

「…」

「…」

「…」

「ベイベ　！！…あの…終わりましたけど…」

微妙な拍手と歓声が上がった。

「…ジーク先生…後で絶対殴る…」

オータムは心に決めた。

「なるほどなー！趣味があると生活の幅が広がるよなー。」

「…どーでもいいーから仕事してくださいよ…」

魔術医師ジークの苦悩は続く

趣味を見つけよう(2)

「釣りなんかどーかな？」

「まだ趣味の話ですかー！？釣りなんかする時間どこにあるんですか！？」

「…じゃあ料理なんかどーかな？」

「料理する時間なんかどこにあるんですか！？」

「…読書なんかどーかな！？」

「読書なんかする…」

「だーーーーー！！なんもできねーじゃねーか！！！！」

「だから仕事してっていつてるでしょ！！」

「休みくれ休みくれ休みくれ休みくれ…」

「うるさいうるさい仕事しろ仕事しろ仕事しろ仕事しろ…」

オータムとジークの2人の言い合いに助手が止めに入って言った。

「まあまああ2人とも…今日は割合暇な方だし、治療さえ止めなければ先生の趣味探しに付き合っただけでしょうよ。」

ジークは助手のその言葉に感謝したが、

治療さえ止めなければというスパルタな言葉は若干引かった。

「じゃあ、時間を掛けずに診察室でできる趣味ってなんか探してくれよ！」

「うーん…」

ジークと助手たちは全員考え出した（ジークは治療しながら）

「診察室でできて…時間要らなくて…治療も止めずにできて…体力も使わなくて…」

「だーーーーー！！そんなもんあるかーーーーー！！！！」

ジークが切れた時、オータムが閃いた。

「歌！そうよ歌があるじゃない！診察中に歌えばいいんじゃない！？」

「歌か！うた…うたかあ…」

「どーかしたんですか？何か問題ありますか？」

「ちょーっとオータムのあの姿を見るとなあ……」

「ジーク先生……殴りますよ。」

「まーなー……歌にするかぁ……」

ジークは趣味を歌にすることにした。

ある診察中……

「しゃらららー……しゃらららー」

「せ……先生！時と場合考えてくださいよ！早く呪文唱えないと死にますよ……！」

またある診察中……

「じつゆーじつゆーがーほしーいい！」

「ちょっと上手いじゃない……悔しい」

オータムはちらっそー思っている

「いまいちだから辞めてほしいなー

かたや他の助手はそー思っている。

でもなんだかんだ趣味の歌は続いているみたいである。

魔術医師ジークの苦闘は続く……

感動の授与式

「ジーク先生！イタリア王国からの兵士の方が来ていますけどどしましょうか？」

「適当にあしらってくれよ！こっちは忙しいんだから！」

「先生の戦場での医療活動に貢献して賞が貰えるらしいですよ！そして来週授与式があるので来てほしいんですって。」

「えっ！俺に…？そーか…？丁重にもてなしいてくれる？」

「…かつこよく『俺は賞なんかに興味ないとか』言って下さいよ。」

「いや…やっぱり自分のやってることを認められるのって嬉しいだろ。」

「…そーですね！たまにはいいかもしれませんね。」

授与式当日…

診察所

「ってなんで授与式に診察所で診察してるんだよ！せつかくの俺の晴れ舞台なんだから行かせてくれてもいいだろ…！」

「まあまあ…先生がいないと患者たちが死んでゆきますから。オータムが代わりに行ってくれてますから」

「なんであいつだけ…」

授与式会場

「魔術医師ジーク代理人オータム！」

「はい。」

「貴殿は戦場での医療活動という……ここに表彰する。」

観衆がオータムに向かって満面の拍手をした。

「ありがとうございます。このような賞を頂いてジークも非常に喜んでいいることと思います。ここでジークより手紙を預かっているの
でこの場で読み上げたいと思います。」

オータムは預かっていた手紙を開き読みだした。

「本日はこのような賞を頂き、非常に光栄です。しかし、私は本来このような賞をもらえる人間ではないのです。私は戦場で患者が多く人が傷ついているにも関わらず、何度も何度も逃げようとしてしました。治療しても治療してもキリがなく、終わりのないこの地獄に耐えられなかったのです。しかし、私が今この賞をもらっているのは、ここにいる…オータムと…2人の助手のおかげなのです。彼女たちはこの地獄にもめげることなく、ただひたすら患者のために…いつも笑顔で…時には私を元気づけてくれました。だから、私がこの賞をもらって嬉しいのは…この助手の3人が表彰されているようで嬉しいのです。本日は本当にありがとうございます。」

オータムの目には涙がたまっていて、声は感動で震えていた。観衆から改めて満面の拍手が送られ授与式は幕を閉じた。

授与式後診察室にて

オータムは帰るや否やジークに熱いハグをした。

ジークは照れながら言った。

「おっおい！どっどーした！急に…」

「…ありがとうございます。あんな風に思ってくれているなんて…嬉しかった…」

オータムは助手達に手紙を見せた。

すると助手たちもまたジークにハグをした。

ジークは照れながらも心の中では罪悪感でいっぱいだった。

・ラーマさんが来てるって聞いたからどうやってかっこよく見せよ

うかって一生懸命考えて書いただけなのに…この状況ではとても言えない…墓場まで持っていく…

魔術医師ジークの苦悩は続く

捨てきれない情

「おーい！こいつらを早く治してやってくれ！」

大戦に参加している兵士長が負傷したものを連れてやって来た。

「うちは兵士はお断りだから！辞めてから来てくださいね！」

オータムが言った。

「なんだと！いいから早く治せ！」

兵士長は声を荒げて言った。

オータムはため息をついて叫んだ。

「ジーク先生！兵士がここに来てます。治療を希望してますけど…」

ジークはすぐやってきて言った。

「ここにいるのは全て戦争に巻き込まれてる者ばかりだ。戦争屋には治す気はない。帰れ！」

「つべこべ言わずに治せ！さもないと痛い目にあうぞ！」

兵士長は呪文を唱え始めた。

ジークはため息をつき、指を動かした。

すると、兵士長の腕がポロツと落ちた。

「うおおおお！な、なんだ！何をした！！」

「俺は伝説の魔術医師と呼ばれている。お前ごときに痛い目にあわされる俺じゃあないわー！わははは！」

だいぶストレスがたまつて、この人たちに憂さ晴らししてるな
オータムは思った。

兵士長は土下座して言った。

「頼む！俺はいい！負傷しているあいつらだけでも治療してやってくれ。頼む！あいつらには帰りを待っている家族がいるんだ！」

「…お前らが傷つけたものに家族はいないのか？戦争に巻き込んだものに家族はいないのか？」

「…」

「死ね！お前らみたいなやつらは皆死ね！」

「あんだ人の命を差別するのか？」

「する！ここでは、俺がルールだ。治すか治さないかも俺が決める！」

オータムは黙って聞いていたが、やがて口を開いた。

「兵士を辞めなさい。二度と人を殺さないと言っなら、治してもいいですよ！」

「…兵士を辞めるなんて言ったら、国に反逆者扱いで家族もろとも死刑になる！…それはできない。」

「選りなさい。家族もろとも国を捨て、北へ逃げるか…それとも今ここで死ぬか！」

「…わかった。あいつらにも事情を説明して説得する。」

「約束ですよ！ジーク先生。治してやってください。」

「…しよーがねーなー！！面倒くさいなあ！」

なんて医者だ

兵士長は思った。

数か月後

兵士が診療所に来た。今度は兵士長を連れて…

「…頼む！約束を破って今更こんなところに来れた義理じゃないのはわかってる。だが…だが、このままじゃ…このままじゃ兵士長が死んじゃう！！」

ジークはそう言った兵士の胸ぐらをつかんで叫んだ。

「今度は何人殺したんだ！帰れ！」

「誓う！今度こそ国を逃げるって誓う！！国を出て追われるのが怖かったんだ！頼む今度こそ約束を守るから！！」

「お前たちの約束に何の意味がある！この世には救えねーバカどももいる。お前たちみたいなのだよ！」

ジークはそう言い放った。

兵士は泣き叫び、ジークに襲いかかってきた。

ジークは呪文で、兵士を吹き飛ばし気絶させた。

そして、兵士長もろとも外へつまみ出した。

1日後

兵士は目を覚ました。

傍らには兵士長が横たわっていた。

そーか…結局兵士長を救えなかったんだ…

兵士が横たわりながら涙を流していると、兵士長がピクリと動いた。

兵士はすぐさま起き上がり兵士長を見た。

兵士長の負傷は全て治っていた。

「なあ、オータムいつまで戦争が続くんだろうな…」

「さあ…でも、先生が非情になりきれない所…私好きですよ…」

「…何が…あいつらはまた人を数えきれないくらい殺して…いつかはお前たちの大切な人まで殺すかもしれないんだぞ…俺はそんな奴らを…見捨てきれないんだ…」

「…」

魔術医師ジークの苦悩は続く

弟が帰ってきた

「おお！息子のあのひどい火傷が跡形もなく…先生！なんとお礼を言つていいやら。」

「さつさと帰れ！次！！」

そのあまりに冷たいジークの言動に対して、オータムがジークに向かって叫んだ！

「先生！いくらなんでもひどすぎませんか！？せつかくお礼を言つてくれているのに…」

「その理由を教えてやろうか！？それは、俺が156時間不眠不休だからだよ！！最近の患者数は尋常じゃないぞ！このままじゃ本当に発狂しちまうよ！次！！」

確かにな

オータムは思った。

ジーク先生といえどさすがに最近の患者の数は尋常じゃない。オータムたち助手は3人でローテーションしているが、それでさえ最近では倒れそうなほど忙しい。ジークの顔も殴りまくってもはや原型をとどめていない（ジークは自分で治療できるが…）

「次って言つてんだろぅが！患者連れてこいよ！！」

しかし、次の患者は現れなかった。

代わりに診療所に入ってきたのは弟のロスだった。

「患者はもういないよ、兄さん。他の患者は全員治したよ。」

「ロツロロロス！お前なのか！！本当にお前なんだな！」

「ただいま。今まで一人にさせて本当にごめんよ。」

ジークはロスに熱いハグをした。そして、即座に倒れこんだ。

「ロス…」

「オータム…ただいま。」

「今更どの面下げて帰ってきた！って言いたいけど…今の状況じゃ受け要らざる負えないわね。」

助手の2人もロスの帰還に素直に喜んだ。

3時間後：

ジークは目覚めた。

診療所に行ってみると、ロスが自分の代わりに患者の治療をしてくれている。

ロスがジークに気づき穏やかな声で言った。

「まだまだ寝ていいのに。しばらくは俺に治療は任せて自由にするといいよ！」

「ローサー！お前はなんていい弟なんだ。」

そういつてまたロスにハグをして、外へ出ていった。

「どこへいったんだろ？てつきり寝ると思ったんだけど……」

「大方、恋人のところにも行ってるんでしょ……」

「恋人！？今兄さんには恋人がいるの？」

「だから、そういつてるでしょ！」

「じゃあ、オータムは？」

「…仕事しろよ！バカロス！！」

「ふーん！そっか……」

この会話を、助手たちがカーテン越しで聞き耳をたてていた。

助手の2人はひそひそ声で話し出した。

「えーっ！何！？この三角関係！」

「いや…オータムは前からジーク先生に好意を持ってたんじゃないかな……」

「なるほど…でロスはオータムのことを！？あっもしかしてロスが

突然出ていったのってそれが原因じゃ！」

話に夢中になっていると、ベッドの患者が死にそうな声で助手たちに話しかけた。

「あのー早く先生の元へ連れてってくれんと…！ っ…息が…」

魔術医師ジークの苦闘は続く

弟の事情

ロスが診療所に帰ってきて1週間が経った。

「ロス：お前が帰ってきて俺は本当にうれしい！」

ジークは今日の朝もそう言いロスにハグをし、眠りに入った。

緊急時の時以外はロスとジークで12時間ずつ交代勤務で当たるところにした。

ジークはロスが帰ってきたことより、12時間ずつ交代勤務になったことに対して涙がでるほど感動していた。

ロスの処置中、オータムはロスに言った。

「さすがはロス先生ですね。ジーク先生と仕事を分けられるのは世界中であなたぐらいなものでしょうね…」

「いやあ、俺ぐらいの魔術医師は世界中にはごろごろいるよ。」

「…意味のわかんない謙遜しないで下さい。あなたほどの医師がごろごろいたら世界中に怪我人は一人もいませんよ。」

「ありがとう。オータム：でも、今なら僕とジーク兄さんなら、どっちが魔術医師として上なんだろうね？」

「…」

オータムは答えを差し控えた。

他の助手がロスに対して質問した。

「ロス先生はこの診療所を出て何をしていたんですか？」

ロスはオータムに聞こえるような声で言った。

「16才の時にここを出て、医療魔術先進国ロイツの魔術研究所で働き、勉強してたんだよ。」

「えっ！医療魔術の最先端じゃないですか！？…もももしかして所長ロスってあなたのことだったの！？」

「…まあね。」

「すごい！すごい！オータムとジーク先生はこのこと知っていたの？」

オータムはバツが悪そうに首を縦に振った。

「なーんで教えてくれなかったんですか！？ 私たちにはロスは行方不明になったって言ってたじゃないですか！！」

「…」

オータムが答えに悩んでいるとロスが助けに入った。

「まあまあいいじゃないですか。」

3時間後：

ジークは体力が回復し、目が覚めた。（長年3時間睡眠以上取ったことがないため、どんなに疲れていても3時間後には目覚めてしまう。）

ジークにはある計画が頭に浮かんでいた。

そして自分なりのビジョンをなんとか紙にまとめることに成功した。その紙を持って、ロスのところへ行った。

「ロス…お前が帰ってきて…」

「兄さん！1週間ハグされっぱなしだよ！もういいよもう！！」

しかし、相変わらずロスにハグをした。

ロスはハグされながらもジークに言った

「…もう…そんなことより、僕と兄さんのどっちが魔術医師として上だと思う？」

「そんなのロスに決まってるじゃないか！お前だよお前！！そんなことよりお前に見せたいアイデアがあるんだ！！」

「そんなこと…」

ロスはその言葉に非常にショックを受けた。

兄のジークを超える魔術医師になるようにロスは今まで頑張ってきた。

そして猛勉強と仕事によつて医療魔術所長という誰もが世界一と評されるほどの地位も手に入れられた。

それほど超えたいと思っていた兄にさらっと流されて、ロスは非常に腹が立った。

ジークは手に持っていた書類をロスの前に広げた。

病院を建てよう

「俺たちの病院を設立しないか!？」

ジークはロスにそう言った。

ロスにはジークの言動の意味が分からなかった。(この時代、民間では個人の診療所くらいしかなかった。)

「病院?」

「軍の大規模な診療所みたいなもんさ! いや、それよりはるかにでかい診療所を建てたいんだ。」

「そんなもの俺たちに建てられるわけないじゃないか! 第一、お金はどうするのさ!！」

「お金は俺たちがずっと診療所をやって来た金がある! 何年間も使う暇さえなくて気が付いたらこんなに貯まっていたよ! わははは!！」

ロスはジークの持っていた計画書に目を通した。

「こんなに…小国の国家予算くらいあるじゃないか!」

「いやー! 金持ちからはガンガン金貰ってたからな! 貧乏人どもにも払えられる限り徴収してたし…」

「鬼!」

「命の値段としちゃ安いもんだと思うけどな。」

「お金はあっても、魔術医師はどうするんだ!?! この大戦中じゃほとんどが軍に属しているだろ!？」

「かき集められるだけかき集めて、それでもダメだったら一から育てるしかないだろうな…」

「一からって…そんな時間どこにあるんだよ!?! 医療魔術は一朝一夕でできるもんじゃないだろ!」

「時間ならあるよ…俺とお前と一人毎日18時間ずつ働けばいいだろ?」

「…なんでまた…こんな計画を?」

「俺たちがいなくなった時、誰が患者を助けられるんだ？…最初は辛いかもしれないけど、この計画が成功したらもつと多くの患者が助けられるんだ！」

「兄さん…」

ロスはジークのこの言動に深い感動を覚えた。

そして、同時に激しい敗北感に苛まれていた。

「ロスよ！10年後、20年後を見て、いい魔術医になれよ！」

ジークは勝ち誇ったようにそう言って、外へ出ていった。（ラーマに会いに）

その後、ジークの診療時…

オータムがジークに話しかけた。

「ジーク先生…あの偉そうな話…嘘ですよね？」

「えっ！いや、嘘なもんかい。そういう気持ちももちろんあるよ…」

「他にどんな気持ちがあるんですか？」

「いやーやっぱり10年後、20年後考えたらねー！休み欲しいし…もし結婚でもしようものなら新婚旅行だって行きたいし、子作りだって…ねえ！…」

ジークはウキウキしながら言った。

「…はあ…」

オータムはため息しかでなかった。

採用面接

「次の人！」

40代の女性と20代の男が入ってきた。

「いや…あのひとりだけなんだけど…」

「私は付添です。採用して頂きたいのは息子なんです。この子はやればできる子なんです。ほら、チャちゃんからもご挨拶して！」

「…チャです。よろしく願います。」

オータムがジークに耳打ちした。

「ジーク先生…親同伴はどうかと思いますよ。だってあの人もいい大人じゃないですか!？」

「いや…やればできるっていうお母さんの言葉を…俺信じようかと思っただけど…」

「だから…ただのマザコンじゃないんですか!？」

「採用。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。この子はやればできる子なんです。ほらっ！チャちゃんからもお礼言いなさい。」

「…ありがとうございます。」

「次の人！」

負のオーラに満ちた女の人が出てきた。

「…初めまして…わたくしサシャと申します。」

「特技は？」

「黒魔術です…特に呪いの呪文では負けたことはありません…彼を取られた時なんかは2週間入院させましたから…フフフ…」

「…2週間呪い続けられるなんて根性あるんだね…」

オータムが耳打ちした。

「ジーク先生…ジャンルが違いますか？どっちかというと戦う方だと…いやそれすら違うような…」

「いや…こういうのが伸びるんだよ！」

「いやいやいや…負のオーラに満ちてますよ！」

ジークは叫んだ。

「採用！」

「ありがとうございます。…あーよかった…あなたを呪わずにすみしました…フフフフ」

「次の人！」

いかにも魔法が使えなさそうな老人が入ってきた。

「えーっと…じゃあ自己紹介からどうぞ！」

「じゃ…ジャシャーンと申すものじゃ！魔術医師歴…いくつじゃったつけ？」

オータムが耳打ちした。

「ジーク先生…この人不採用でしょ！？さすがにこの人は不採用ですよね！？」

「いや…この人には何かある…」

「いやいやいや…この人には治療がいるくらいでしょ！」

オータムの心配をよそにジークは叫んだ。

「採用です…！」

「わしに全て任せときなさい…若いもんにはまだまだ負けんぞ！」

採用面接後…

「先生…全員採用してどうするんですか!!」

「だって誰が凄いかわかんないじゃん!」

「…でも、多少は選びましようよ。じゃなきゃ最初から全員採用でよかったじゃないですか!？」

「…採用面接…やってみたかったんだよね。」

「はぁー頭痛くなってきた。」

オータムはため息をついた。

さあ授業を始めよう

とうとうジークは念願の病院を設立した。

総勢50人の魔術医師候補を迎え、建物も新しく立て直した。

「今日は最初の授業か…。」

「先生！前に弟子募集した時はみんな辞めちゃったんですから今回は気を付けてくださいよ！」

「わかってるよ。今回は余裕がありますから！」

「えーっ今日は切り傷を治す魔法をやります。できない人！」

誰も手を挙げなかった。

「じゃあ切り傷がある患者を回してもらってから、治してください。」
軽傷患者が50人ぐらいやって来た。

「じゃあ、一人目よろしく！」

まず、マザコンのチャがチャレンジした。

「よ…よろしくお願いします。」

チャは魔法を掛けた。すると、切り傷はみるみるうちに治っていった。

オータムは感心して言った。

「見直しましたよチャさん！やればできるんですね！」

ジークはその光景を見て言った。

「お母さん…遠くから魔法かけちゃダメでしょ…そこにいるのはわかってるんですよ！」

するとチャの母親がチャの隣に突然現れた。

チャの母親は恥ずかしそうに言った。

「申し訳ありません…！ついついチャちゃんが心配で…」

次の人はおじいちゃん魔法使いのジャシャーンが出てきた。

どうやら魔法を忘れたらしい。

次の人は黒魔術のサシャが出てきた。
サシャが患者に魔法を掛けると、なんか傷口が広がっているような気がした。

「…この人可愛いから少し意地悪しなくなっちゃいました…フッフ」

オータムにジークが囁いた。

「やっぱ…この3人はダメかな…」

「だから言っただじゃないですか！ちゃんと責任とって立派な魔術医師に育ててくださいよ！」

一部の例外を除き、ほぼ皆軽傷を治す呪文はクリアできた。

次に重症患者達を連れてきた。

「この患者の怪我を誰か治せる人！」

43人が全員試したが、駄目だった。

7人の有能な魔術医師候補は治すことができたが、そのうちの3人は疲労でフラフラだった。

なんてこったい…今回は余裕があるのに人材は不作だ…
ジークとオータムはひそかに思った。

今が我慢の時！？

魔術医師候補を採用して2か月がたった。

まだ、一人も辞める人がいなかった。

理由は給料が凄くいいこと、週休2日制（残業なし）、優秀な教師（ロス、ジーク）がいることだった。

しかし、ロスには悩みの種もあった。

それは、2か月経ったにも関わらずあまり魔術医師候補は成長していないように思えたからだ。（特にチャ、ジャシャーン、サシャ）オータムも同様に感じていた。

以前弟子をとった時は、2カ月でジークの仕事をかなり楽にできる魔術医師が二人も誕生した。

今のメンバーではそんなことはとても望めそうにない。

そこで、ロスはジークに相談することにした。

「兄さん…なかなか育ってないような気がするんだけど…」

「ロスはせっかちなんだよ！みんな確実に力をつけてるよ。」

「そーかなー…」

ある日のこと…

「じゃあ、今日も君ら3人には軽症患者を見てもらいます。」

「ジーク先生！チャにはそろそろ重症患者を任せてもいいと思います。」

「お母さん！彼にはまだまだ早すぎます。まずは軽症患者で経験をつけてからです。」

「…他の子たちは重症患者を任せられているのに…差別だわ！！」

「差別…ですよね…やっぱり…」

黒魔術師のサシャが便乗した。

「そっじゃー！差別じゃー…迫害じゃー…わしゃまだまだ若いもんには負

けんぞう！

ジャシャーも便乗した。

ジークはでこの3人を殴り倒したい衝動に駆られたが、必死にそれを抑えこんだ。

「チャ……というかお母さん！いいかげんに帰きなさい！！チャのためになりません！サシャ……可愛い患者を呪う癖をやめなさい！重症患者はそんなおふざけ一つで命取りになります！ジャシャーンは……魔法をまず学びなさい！」

ジークはそう叱ったが、彼らはまだふてくされていた。（チャの母親は帰らないし）

そして、サシャがボソツと呟いた。

「そんだから先生人気ないのよ……」

助手はそれを聞き、ジーク先生に聞こえないように願ったがジークはばつちり聞いていた。

横にいたジークはニッコリと笑い、言った。

「じゃあ始めなさい……ちよつと俺は外に出てくるから……」

そう言い残しジークは外へ出ていった。

どこへ行くのだろうと思い、助手は後をつけると外れの部屋に入っていた。

助手がその部屋の壁に聞き耳をたてると、発狂したような叫び声が聞こえてきた。

「うおー！ー！ー！！わあー！ー！ー！！くっそー！ー！ー！！なんてむかつくやつなんだ！！殴り倒したい殴り倒したい殴り倒したい！！実力もねーくせしやがってー！ー」

30分後:

（声が少し枯れていた）

助手はジークを見てよく我慢しているなと思った。

ある夜に…

「オータム…この後時間ある？」

「はい。なんですか？」

「ちよつと食事に付き合つて欲しいんだけど…」

「えっ！もつもちろんいいですけど…」

「ほんとに！？あーよかった。デートの下見したかったんだよね！」
「…」

高級レストラン「秋晴れ」にて…

オータムとジークはテーブルに座り、高級そうな料理が運ばれてきた。
「ふーん…なかなかよさそうな雰囲気だな。料理もおいしいし。」

「ラーマさんと食事するの初めてじゃないんでしょ？今更下見なんかしなくても…」

「いや…そろそろアレかなと思って。」

「アレって…あ、あーアレですか…そうですね…もう長いですもんね…」

オータムはワインを一気飲みした。

「まあ…そろそろな…俺もいい年だしな。けじめつけようと思ってな。」

「…おめでとうございます。」

「いやあ…まだオツケーもらえたわけじゃないけどな！」

「…そうですね…頑張つて下さいね。」

「おー！まずは告白しないと始まらないしな！」

「…告白？プロポーズじゃないんですか？」

「プ、プロポーズ！？おいおい気が早すぎるだろ！」

「もしかして…まだ付き合ってもないんですか！？」

「…」

「もーなんなんですか！ー驚かせて！いい大人なんですから告白なんてもうしてるかと思ってたよ！」

「…悪かったな！俺はお前と違って恋愛経験が少ないんだよ！」

「何言ってるんですか！私だってほぼ皆無ですよ。だいたい、15歳からあなたと働いてるくに休みなんか貰えなかったじゃないですか！」

「…そーだつたっけ？」

「そーですよ！」

「そーかー。オータムには苦労かけたな…」

「まだ全然忙しいんですけどね…」

「…あのさ、オータムはさこの仕事を辞めて逃げ出したいって思った時はない？」

「そんなのなにに決まってるじゃないですか！」

「…俺はいつも思ってるよ。」

「知ってますよ。いつも叫んでるじゃないですか。」

「うん…毎日毎日無数の患者たちばかり救っていつて、時間があつという間に過ぎて…本当に嫌になる時がある。」

「…はい。」

「オータムは本当に凄いな。…それだけ。」

「私だって…患者たちだけのために頑張ってるんじゃないですよ。」

「…でも、給料だってもう使い切れないほどあるだろ？患者以外のために働く理由なんてあるの？」

「…自分のためですよ。…私、先生の逃亡を阻止するじゃないですか…それはね…」

「それは？」

「私の…私の尊敬する先生だから…逃げてほしくないんです。」

「…」

「お互い苦労しましたね。」

「ああ……長いような短いような……やっぱり長いなあ……」

KOKUHAKUをしよう

「ラーマさん！僕と付き合って下さい！！…いや『僕』はないな…ラーマ！俺と付き合ってください！…敬語じゃないほうがいいか…俺と付き合おうか！…付き合おうぜ！…あーなんか違うんだよなあ」
「先生！診療中に何を独り言ぶつぶついってるんですか！気味悪いですよ。」

「オータム…俺、告白の言葉を今考えてるんだよ。何がいいと思う？」

「いい言葉がありますよ。ちょっと近く寄って下さい。」

オータムはジークの耳元まで顔を近づけ、叫んだ。

「仕事しろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「わあ！ーびつくりさせんなよ！」

その怒鳴り声にびつくりしてロスが来た。

「オータム、兄さん、何か大きな声がしたんだけどどうしたんだい？」

「ジーク先生に聞いてください！！」

「いやー告白の言葉を考えてたらオータムに怒られてな…あははは。」

「…告白するのはラーマさんにかい？」

「ふーん…」

ロスはオータムをちらつと見た。そして再びジークの方へ視線を写して言った。

「よし！わかった。俺も応援するよ。明日がその日だったよね。今日と明後日も俺一人でやるから仕事のことは気にしないで告白に全力を尽くしてくれ。」

「ロ…・ロスうー！！お前はなんていい弟なんだー！！よろしく頼む。じゃあー！」

ジークは診療所をそそくさと去って行った。

オータムはロスに言った。

「ロス先生。何を企んでいるんですか？」

「別に何も…ただ、兄さんの幸せを祈っているだけさ。」

「…」

「オータムはさ…兄さんがラーマさんと付き合ったら…兄さんを諦められるのかい？」

「…」

ジークの部屋にて

「服は良し！めっちゃめっちゃ高い服で助手、弟子も絶賛だったからな！…店はレストラン「秋晴れ」で予約したし、告白の言葉も考えたし…よしやってやるぜ！…やってやるぜ！…！」

ジークは異様にテンションが上がって、自分の部屋で叫びまくっていた。

ジークが告白しようと決めていた日…ある町のメインストリートにて…

「お待たせしました。ジーク先生。」

「いや、全然待ってないよ！さあ、行こうか！…！」

「あの…私ちよつと行ってみたいレストランがあるんですけど、今日はそこに言ってもいいですか？」

「えっ！…も、もちろん！じゃあその店に行こうか！」

レストラン「秋晴れ」予約したのに…！そこに行こうって言えない俺って…意気地なしか？…

ジークは心の中で叫んだ。

えっ!?

レストラン 「サマーナイト」 にて…

「ジーク先生。何食べます?」

「えーっとねえ…」

全然わからん。何がいいんだろう…
ジークは思った。

「私はこれなんかおすすめてですけど…」

「本当に…じゃあそれにしようかな。」

料理が出てきて、食べ始めた。

「おいしいですね。」

「そうだね。」

「…」

「…」

「あつ、最近はやっぱ忙しいです?」

「いやあ、そうでもないよ。最近は弟子もできたし、弟も帰って来たしね。」

「ロスさんでしたよね? 凄い人なんですよね!?!」

「そうなんだよ…なんか凄い研究所のトップだったらしいんだよ。」

しかも、最年少で!」

「さすが、ジーク先生の弟ですよね。」

「いやあ…」

「…」

「…」

「ラーマの方は最近忙しい?」

「私は変わりないですよ。」

「雑貨屋の方も最近大変でしょ? 戦争もあって仕入だってままなら

ないだろうし…」

「そうなんですよー。なかなか商品が入ってこなくて…」

「…」

「…」

ぜ、全然会話が盛り上がらない。どうしよう…

ジークは告白しようかどうか迷った。

が行くしかない思った。

今言えなかったら次も言えない気がすると思った。

「ラーマ…」

「はい？」

「俺と…俺と付き合ってくれないか？」

「…ごめんなさい。」

「…」

「…そつか。うん…わかった。」

「…ごめんなさい。」

「いや、いやいや全然気にしないでいいんだよ！」

「…」

「あつ…そろそろご飯も食べたし…でようか？」

「はい…」

2日後診療所にて…

助手がジーク先生に話しかけた。

「ジーク先生、どうでした？」

「うん…ダメだった。あははは…」

「えっ！駄目だったんですか！？」

「まあ…ね。さあて仕事しようか…！」

ジークはいつもより仕事に励んだ。

弟子たちの経過観察

「ジーク先生フラれたらしいよ。」

「えーっ！そうなの！かわいそう…」

弟子たちが噂話していた。

「自業自得よ！あの人には、性格上の問題があるんじゃないかしら。」

「

同じく弟子であるサシャが口を挟んだ。

弟子は反論していった。

「そう？いい先生だと思うけどな…」

「あの先生、やたらと弟子をひいきするじゃない？それにさ…」

話の途中でジークが入って来た。

「じゃあ今日も授業を始める。と言っても、いつもの如く実践授業だ。患者を連れてきているから治療を始めなさい。」

サシャが手を挙げて言った。

「先生！私たちはもう先生の指導がなくても一人前に治療できます。」

「

なんで全然できないお前が言う

心の中でジークは思ったが、言わなかった。代わりに諭すように説明した。

「君たちの中にはもう自分が一人前にできると思っている人もいるだろう。ただ、1度の間違いが患者の命を奪う場合、力が足りないで患者が死んでしまう場合が来ることもある。そういった可能性を少しでも減らすために私がついていることを忘れてはいけない。」

サシャはぼそつと言った。

「フラれたくせに…」

シンと静まり返ってサシャのその声が響いた。

ジークはその言葉を見捨てず、患者たちを連れてきた。

そして、20分ほどその部屋を出ていった。（別の部屋では異様な

叫び声がしたと言っ)

30分後:

「い、痛い痛い痛い!!こ、この人…いだだだだ!!」

サシヤの患者が突然すごい痛みを訴えた。

サシヤは呆然としていたが、ジークはすぐに来て、患者を治した。

「サシヤ…かけた呪文が全然違うよ。これでは痛みを訴えて当然だ。

」

「…」

「これが、重症患者の治療だったらどうする?少しの呪文の間違えで重大なことになることをよく理解しておきなさい。」

すつきりした。 -

と心の中でジークは思った。

「なによ…なによなによ!!私ばかり非難して!!私が全部悪いってわけ!?!」

「は?」

ジークは訳のわからないサシヤの切れ方に呆然とした。

しかし、依然おさまらないサシヤはジークに向かってとびきり強い黒魔術をかけた。

ジークはその魔法弾に当たったが、全然効かなかった。

「嘘…」

サシヤは自分の黒魔術が効かないことにショックを受けた。

ジークはため息をついて言った。

「この程度の魔法力じゃ俺には傷一つつけることはできないよ…気がすんだらまた治療を始めなさい。」

「…」

サシヤは悔しそくに患者の治療を再開した。

治療室にて…

「ジーク先生…聞きましたよ。よくサシヤを首にしませんでしたよね。」

「わからないもんさ…誰が最後まで残ってくれるかなんてな。オータム、お前だつてそーだったものな。」

「私はあんなにエキセントリックではなかったです！」

「でも、変な子で、仕事も全然できなかったから1日で辞めると思っていたんだけどな…」

「…そんなに…変では…」

マークさん

「次の人!!」

オータムはいつもの通りに患者を案内しようとした。

その患者はオータムの前でひざまずき、言った。

「オータムさん…僕と付き合ってください。」

「えっ…あの困ります…今診療中なので…」

「じゃあ仕事が終わるまで待ってますので!」

そして、その男性は去って行った。

「えっあのー!!」

オータムは声を掛けようとしたが、その男性はもういなかった。

30分後…

患者のおじいさんがオータムに向かって叫んだ。

「オータムさんや…わしらを置いて行かんでくれ!」

「な、何を言ってるんですか!?!」

患者のある男性も言った。

「こ…今度俺と食事でも…」

「…お断りします。」

患者の子どももこねた。

「僕がオータムのお嬢さんになるんだい!!」

「…ありがとう!でもね…私あなたが大人になるまで待てないわ。そんなに若くないもの…ごめんなさい。」

その後もオータムは6人の男性に告白された。

仕事後…

仕事を終え、帰ろうとすると、さっきの男性が入ってきた。

「オータムさん…僕と…僕と付き合って下さい。」

「…またあなたですか！？あなたのおかげで大変だったんですから！…」

「命がないと思いました…そんな中、あなたと出会って…天使が舞い降りたと思いました。」

「…あなた、マークさんですか！？」

「思い出して貰えましたか？」

「思い出しました！元気でしたか？」

「はい…おかげ様で！」

「ってなんで私なんか…」

「ただただ…あなたのことが好きなんです。」

「…」

「今好きじゃなくてもいいんです。ただ、もつと僕のことを知ってもらいたいんです。最初は友達としてでもいいんです！」

「でも…」

「お願いします…！」

「…分かりました！分かりましたから！！頭あげてください…」

オータムとマークは友達として付き合うことになった。

噂の彼女

「オータムさん、マークという人と付き合ってるんですって！」

「そうそう！マークって以前患者だったらしいわよ！」

弟子の女の子たちは集まって噂話していた。

そこに、診療所一の情報通の助手であるリースがやって来た。

「ちょっとあなたたち！…私抜きでそんな楽しい話しないでよー！何から知りたい？何からしりたい？」

「マークとは今どこまで進んでるんですか？」

「うーんとねえ、まだ1、2回しか遊んでないらしいよ！」

「ふーん。オータムさん奥手っぱいもんねえ…」

「はい。」

弟子のひとりの女の子は手を挙げた。

「はい！そのあなた！」

「マークさんでどんな人なんですか？」

「それが、もともと凄いいお金持ちらしいのよ！！どのくらいかはわからないけど…ね！」

「えー！オータムさん逆タマじゃないですかー！」

「出会いのきっかけは何なんですか？」

「マークは2年前この診療所に運ばれてきたの。ひどい怪我でねえ…ジーク先生の魔法でも完治するのに2か月以上かかったの。そこで、オータムが献身的な介護をしたってわけ。」

「すごーい！すごーい！！」

「オータムさんはマークの事はどう思ってるんですか？」

「さあねえ…付き合ってるってことは嫌いじゃないんだろうけど…ねえ！オータムは色々あるし…ねえ！」

「いろいろ！？いろいろってどういうことですか？」

「それがねえ…昔ロス先生となんかあったらしいのよー！」

「えー！そーいえばロス先生とオータムさんであんまり話さない

ような気もする……」

「でしょでしょ!! それでねえ……」

「…何をしてるのかしら?」

リースが顔を上げるとオータムが作り笑顔で立っていた。

弟子の女の子たちはわれ関せず顔で下を向いて、リースはびっくりして声がでなかった。

オータムはため息をつき、言った。

「あなたたち…もう授業の時間でしょ! ジーク先生が待ってるわよ。あなたたちの成長が患者の命を左右するのを覚えておきなさい。…そしてリース!」

「は、はい!!」

「噂話もいいけど、仕事をやる時はきちんとやりなさい! もう休憩時間はとくに過ぎているでしょう!?!」

「はい! すいません!!」

リースは逃げるように走り去っていった。

「まったく……」

「よく激怒しなかったもんだね。オータムも丸くなったもんだね。」

オータムが振り向くとロスが前にいた。

「噂話ぐらいさせてやってもいいでしょ…まあ私の話だったからかなり腹が立っただけだね。」

「…マークと付き合ってるんだって?」

「うん…まあね。」

「そっか…どう?」

「うん…いい人よ。私にはもったいないくらい……」

「…俺はオータムは誰とも付き合わないって思ってた。」

「…今は好きじゃなくてもいつかは好きになれる…そんなこともあるのかなと思っで。」

「でどうだった? 好きになれたの?」

「…」

大国から来た男

「次の人！」

ロスがそういうと、一人の男性が入ってきた。

「ロス先生！」

「ザックス…か？」

「研究所に戻ってきて下さい！お願いします！！」

横にいたオータムが横やりを入れた。

「ちよつと！患者じゃないのなら出て行って貰えませんか？」

「失礼しました。私は研究所の副所長のザックスといいます。」

「いったい何の用なんです！？」

「ロス先生を連れ戻しに来ました！先生はここよりもっとふさわしい場所があります。」

ザックスはそう言い、ロスの方を見た。

「先生！研究所のみんながあなたの帰りを待っています。帰ってきてください。」

ロスはザックスの顔をじつと見て答えた。

「ザックス…俺は研究所に戻る気はないよ…」

「なんでですか！？」

ロスはオータムの顔をちらつと見た。しかし、すぐにザックスを見て言った。

「ここが俺の帰るところだからさ。」

ザックスは怒って言った。

「じゃあ帰りません！私はここから一步も動きませんよ！！」

騒ぎを駆けつけてジークが来た。

「なんだ！貴様は！！ロスを連れて行きたいんだったら俺を殺してから連れてけ！！」

「おいおい、兄さん。俺は行かないよ！あ、そうだ！ザックスがここで働いてくれるそうだよ！」

ジークはそれを聞くと、ザックスの方を向いて言った。

「…君どれくらい医療魔術できるの？」

「私は先進医療国の研究所副所長ですよ！！医療魔術で右に出るものはロス先生一人です。」

「採用！いやー働いてくれるんだったら、最初からそーいってくれよー！さすが、ロス。頼りになる右腕を連れてきてくれるなんてお前は最高の弟だ！！」

「あなた…ロス先生のお兄さんですか！？これは失礼しました！！」

「いやぁいいんだよ。頑張って働いてくれよ！」

「はっ、はい！！」

強情な男

このところジークは凄く機嫌がよかった。

ザックスが診療所に働いてくれるようになって治療がかなり楽になったからである。

「ロス！ザックス君凄い優秀じゃん！彼ホント凄いよー！」

「まあ、研究所でピカイチの才能だったからね。でもね……」

「でも？」

「まあ、今にわかるよ！」

診療中……

助手が走ってきた。

「ジーク先生！大合戦があり、患者が3000人が押し寄せてきています。」

「3000人か……やれない数ではないな……よし！全員で治療にかか
るぞー！」

ジーク達は全員で協力して治療することにした。

ジークとロスは単独で治療にあたりザックスは他の使える弟子たち
を補佐にあてた。

36時間後……

ジークの方の治療が終了した。

ジークはザックスの様子を見に行くことにした。

まだ、診療所は患者であふれていた。

「ザックス先生！患者の様子がおかしいです。」

「な、何……おかしいな……そんなはずは……」

ジークはその患者の近くへより、診断した。

そして、呪文を唱え患者を治した。

「ザックス、ミスは誰にでもある。ここで踏ん張れるかが優秀な魔術医師だぞ。」

「い、いや私はミスなんかしていない。」

「いやあきらかにミスだろ！認めないといつまでたっても成長しないぞ！」

「……」

ザックスは納得していない様子で次の患者の治療にあたった。

治療終了後……

「兄さん。ザックスはどうだった？」

「変なところでエリート意識がある気がするな。」

「そうなんだよね。自分のミスは絶対に認めないし、自分の認めた人以外には心は絶対に開かないんだよね。」

「まあ、ここで働いてくれればなんでもいいんだけどねー」

「……現金だよ。兄さん。」

ロスのデート

ある治療中のこと…

助手のアリーがロスに話しかけた。

「ロス先生…今度一緒に食事に行きませんか？」

「いいよ。いつにする？君の休みに合わせるよ。」

「やった！ロス先生…紳士だわ」

耳に壁あり障子あり…瞬く間にその噂は広がった。

女の子の弟子たちの会話中…

「ロス先生と助手のアリーさんが今度食事に行くらしいよ？」

「えー！シヨック…ロス先生とアリーさんが付き合うなんて…」

「アリーさんにはロス先生はもったいないよねー。」

「そうそう！何様って感じよねー！」

ロス女性から人気があったので、弟子と他の助手にとってアリーは敵になった。

「アリーさん！来週の休むなんですけど私と代わってもらえませんか？妹の結婚式があつてどうしてもこの日は休みたいんですよ。」

「えっ！そうなんだ…アマンダも同じ日休むらしいからアマンダに代わってもらえとうれいんだけど…」

「アマンダはちょうどその日に母親の誕生日みたいで…どうしてもアリーさんが用事があるんでしたら諦めます。…何か特別な用事ありますか？」

「そうなんだ…じゃあしょうがないよね…いや、大丈夫よ！妹さんの結婚式ですものね…！」

「わーい。ありがとうございます。」

「いえいえ…」

ロスとアリーの治療中…

「ロス先生…すいません！！空けてもらった日なんですけど、どうしても私が空けることができてなくて…ごめんなさい。」

「いや、しょうがないよ。そんな時もあるよ。次の休みとかでも全然いいし…」

「本当ですか？ありがとうございます。」

ちょうど同じことが2か月ほど続いた。

ロスとアリーの治療中…

「ロス先生…」

「またか…了解。次の休みまた空けておくから…」

「いえ、もう結構です。これ以上は先生に迷惑はかけられません。本当にすいませんでした。」

「いや…君は悪くないのに、こんなことおかしいよ。2か月も休みが取れないなんて…ちよつとオータムに言ってくる。」

「いえやめてください！…私もきつと…同じことしますから…彼女たちの気持ちも…残念ながら、私わかつちゃうんですよ。…怒る資格ないですよ。」

「…わかった。」

また、ある診療中…

「あれ、今日の助手はアリーって聞いてたけど？」

「アリーさんは体調不良で休みました。」

「ふーん…」

助手の女の子は後ろめたさからロスの目線を逸らした。

アリーの部屋にて…

アリーが一人で寝込んでいると、ロスが中に入ってきた。

「ロス先生！どうしたんですか？治療中じゃないんですか？」

「今日は兄さんに代わってもらったよ。」

そう言つて、呪文を掛けた。

すると、アリーの熱はたちまち冷めて、体力が回復した。

「自然に治る病気だったら、呪文を使わない方がいいんだけどね…

今日は特別。さあ準備して！」

「準備つてなんですか？」

「何って…食事に行くんだよ。前から約束してたでしょ。さあ、早く準備して！」

「ロス先生…ありがとうございます。」

結局ロスとアリーは食事に行った。

ジーク・ザ・ダンシングナイト

診療中、ジークがオータムに話しかけた。

「オータムってさ…今幸せ？」

「別に普通ですけど…」

「いやーそーだよなー！かつこいい彼氏がいるんだもんな！！」

「彼氏じゃありませんけど…」

「俺ってさ…なんでモテないと思う？」

「知りませんよ！！てか仕事してくださいよ！！」

「今度祭りあるよね。そこでちょっと楽しんじゃおっかな！？」

「いいんじゃないですか…」

「そうだよ。この際、彼女がいるいないは忘れて踊り狂う…そんな日があってもいいよね！！」

「まさか…ジーク・ザ・ダンシングナイトをやるんですか！？」

「そう…一夜限りの復活さ…ジーク・ザ・ダンシングナイト！」

「ちょちょちよっと待って下さい…やったあ！私その日非番です！

！」

「オータム…運がいいな…その日は伝説の幕開けだぜ！！」

1時間後…

「兄さん！聞いてないよ！！その日にジーク・ザ・ダンシングナイトやるなんて！！俺その日仕事だもん！！」

「…残念だなロス…だが、お前のサポートがなければ決して復活させようなんて思わなかったぜ！！…ありがとうな！！」

「…ザックスにその日の治療代われるかどうか聞いてくる！！」

1日後…

ジーク・ザ・ダンシングナイトをやるという噂が流れて、住民たちが診療所に押し寄せてきた。

「本当に…本当にやるんですか!？」

「ああ…やるともさ!!」

「じゃあ、わしらも久々に燃える時が来たようじゃな!!」

「じいちゃん!歳を忘れて踊り狂えよ!!」

「ああ…この日を待っていたんじゃよ!!」

誰もがジーク・ザ・ダンシングナイトを心待ちにしていた。

祭り当日…

その日は土砂降り、しかも運悪く国王がなくなり、国中が喪に服した。

「こんなことって…」

「そー気を落とすなオータム…次の機会にまたやろうな…」

その時、隣にいた助手が当然の質問をした。

「ところで、ジーク・ザ・ダンシングナイトってなんですか？」

ガラとバラ

ある診療中、助手のアリーがジークに尋ねた。

「オータムさんとジーク先生って知り合って何年になるんですか？」

「なんだよ、いきなり…そーいやもうずいぶん経つな。」

「診療所を始めたのはいつ頃だったんですか？」

「それは、もう10年ぐらい前だったと思う。」

「オータムさんはそれよりも…」

「いや、後だったな…思い出した！！今年が20歳だろ！7年前だよ。」

「当時のオータムさんてやっぱり仕事できたんですか？」

「いやー、何やってもダメだね。俺は最初は弟子だったんだけどね、何度も先生に『辞める』って怒鳴られてたもんだよ…」

「へええ…そうだったんですか…」

「だけど、あいつの凄いところは辞めないで、次の日には怒られたことを忘れないで一つ一つ治していったところだな。それで今のオータムが出来上がったってわけ。」

「なんか…ためになる話ですね。ジーク先生が弟子の時の先生は今どうしてるんですか？」

「さあてね…5年前に魔大戦が勃発してね、軍に魔術医師を徴収されたり、逃げちゃったりで診療所から先生が1人消えて、2人消えて…ある夜誰もいなくなっていたってわけ。」

「…」

「途中までロスにも手伝わってもらってたんだけど、あいつの留学があつてそれからずっと一人で魔術医師やってたな…オータムはずつと残ってくれたけどその時の助手も全員辞めちゃったな。」

「…」

「なんか…しみりしちゃったな…さあ仕事仕事。」

ある診療中…

オータムが、ジークの部屋に入ってきた。

「ジーク先生…ガラ先生が…戻ってきました…」

「ガラ先生が！…すぐ行く！！」

診療所に行くと、一人の男が廊下を見渡していた。

「ガラ先生！！」

「オータム、ジークか…二人とも立派になったな。」

「軍の医療施設の勤務は終わったんですか？」

「ああ…ひと段落ついたよ…」

「あの…奥さんは…」

「元気になって、今では家族ごとこの町に引っ越してきたよ。」

「てことは…」

「ああ。この町でまたお世話になるよ！！」

「やったー！」

ジークとオータムはガラに抱きついた。二人とも目には涙を浮かべていた。

二人が抱きついていると、後ろからひょこつと背の小さな男が出てきた。

「バラ！！てめー何しに帰って…」

そう言いかけたジークをオータムが涙目でジークを制止した。そして、目で訴えかけた。

「…くそっ！バラ先生！おかえりなさい。」

そう答えたジークをオータムは精一杯抱きしめた。

「…いやあ、まあ俺がいれば1000人力だからな！」

バラは得意げに話しかけてきた。

ガラがジークに囁いた。

「許してくれ。あいつも俺も苦しんでいたんだ。あんな戦争が起きて正気ですつとやってこられたお前が凄すぎるんだよ。」

「ガラ先生はバラとは違います。最後までこの診療所に残ろうとし

てくれたじゃないですか。あいつは…あいつは…」

「…すまない…」

「なんでガラ先生が謝るんですか!…」

困ったなあ

バラとガラが診療所に来て2週間が経った。

診療所を建てたのは他ならぬガラだった。

さすがはガラは並外れた魔法力と豊富な経験で立派に診療をこなせた。

だが、バラは：昔から大した魔術医師ではなかったが、今では昔とは比べ物にならないくらいレベルが落ちていた。

そのくせ、プライドは高く調子乗りだったので弟子や助手からは大いに嫌われた。

ジークとオータムの診療中、オータムにジークが話しかけた。

「オータム：なんであの時バラを追いつき出さなかったんだ？お前が一番バラにいいめられたじゃないか：」

「いいめられたなんて：あの人がいたから今の私があるんです。それに、あの人はガラ先生の弟です。ガラ先生の気持ちを考えると：」

「：時々、お前の気持ちを考えると胸が痛くなるよ。もっと好きに生きればいいのに：もっと感情で人にぶつかっていければいいのにつて。人のことばかり優先してるお前を見ると：」

そういつてジークはオータムの頭をそつと撫でた。

「ジーク先生：」

オータムは涙が落ちないように目をつぶった。

ある診療中：

「バラ先生：早くしないと患者さん死んじゃいますよ！：」

「うるさいな！：じゃあお前やってみるよ！：」

「：」

ジークがバラの怒鳴り声で駆けつけた。

「何やってるんですか！？死にそうじゃないですか！：」

そうジークは言い、呪文を瀕死の患者にかけた。
すると、患者の傷はたちまち治った。

「バラ先生！今日のあなたの担当患者は軽症患者のみのはずです。
重症患者なんてどうやって連れてくたんですか？」

「さあねえ…こいつが間違えて連れてくるもんだからなあ！こつち
はいい迷惑だつたんだがなあ！」

「…」

「まあ、お前なんていなくても俺一人でこんなの治せたがな！」

「…」

ジークは黙ってその部屋を後にした。

その部屋の助手がジークの後を追ってきた。

「ジーク先生…」

「わかつてる…すまないな。バラ先生が何かやらかしたらまたすぐ
に呼んでくれ。」

月末日…

「おかしいな…」

助手の一人が首をかしげていると、オータムがそこへやって来た。

「どう計算しても診療代が全然足りないんです…」

「そんな…ちよつと計算さして…」

オータムも計算してみるが、やはり3割ほど足りない。

「なんででしょ…困つたね。」

そこへ明らかに高そうな服や装飾品を身に着けているバラが歩いて
いた。

「オータムさん！きっとバラ先生ですよ！！」

「…あそこまでわかりやすく横領する人も珍しいわね…」

「尋問しましょう！」

「いや…バラ先生とガラ先生がこの診療所を建てたんだから、本来
あの人たちがいくら使おうと…しょうがないのよ。」

「そんな…」

「大丈夫…ジーク先生にはちゃんと報告するし、ガラ先生にも注意してもらおうようにするから。それにあなたたちの給料だってちゃんと払えるだけが残ってるんだから。後は、金庫の暗証番号を変えましょうか。」

「…」

後日、ジークにオータムがこの件について相談した。

「バラ先生…本当に困った人だな。」

「どうでしょう…」

「どうしましょうっていわれてもなあ…ガラ先生に言ってもしガラ先生が責任感じて辞めるなんてことになったら困るしなあ…」

「困りましたね。」

「困ったなあ。」

ジークとオータムは困った。

14歳に告白されて舞い上がる26歳

「困ったなあ……」

「何がですか？ ジーク先生。 バラ先生の件ですか？」

「いや……全然違うんだけどね……14歳の女の子に告白されちゃってね。」

「…何嬉しそうにしてるんですか!!」

「うっ嬉しそうにしてるわけないだろ!!」

「14歳の子に告白されてデレデレしてるなんて犯罪ですよ！この犯罪者！！」

「おま……なんてことを！！」

「いいからさっさと断って下さいよ!」

「わ、わかってるよ!!」

ジークはその女の子と会うことにした。

「この前はどう……告白してくれてうれしかった。でもな、でも君とは付き合えない。」

「どうしてですか？」

「いや……その君とは年齢も離れているし……」

「年齢なんて関係ないじゃないですか！私もう大人ですよ！愛があればそんなの関係ないですよ！！」

「いや……しかしだな……」

「私：諦めませんから！」

そう言い残して女の子は去って行った。

その話を後でオータムが聞き、あきれ果てた。

「ばかばかばか！……なんで年齢の話なんか持ち出すんですか！？そんなこと言われたらあなたがその子に未練があるみたいじゃないですか！？」

「…だって、恋愛対象じゃないなんて言われたらその子傷つくだろう…だから…」

「しょうがないじゃないですか！？恋愛対象じゃないんだから！！何振ってもいい印象でいようとしてるんですか！？男なら振る時は悪者になるくらいの覚悟は持ちなさいよ！」

「…そんなこと言っただって…あつ！自分だって断りきれずにマークだかジミーだかわからない人とわけわかんない関係作ってんじゃない！」

「…今は私のことはいいじゃないですか…」

「でたよ！！でたよオータムさん！自分のこと棚に上げてそれはないんじゃないですか！？」

「わ、私は…その…可能性があるじゃないですか！？まだ、その人と付き合うかもしれないじゃないですか！」

「好きなの？」

「…いえ…」

「ほらー絶対ないじゃん！！」

「ともかく…次はちゃんとビシツと言いなさいよ！」

そう言い残してそそくさとオータムは逃げていった。

廊下で歩いていると、その女の子がジークめがけて走ってきた。

ジークは小さくつぶやいた。

「お前みたいな子供には興味ないんだ！お前みたいな…君みたいなお子ちゃまには興味ないんだ！…よし！」

その女の子は廊下の交差点でロスとぶつかった。

ロスはぶつかった女の子をお姫様抱っこで持ち上げて言った。

「ごめんよ…大丈夫かい？今ベッドまで運ぶから。」

「…はい…」

その女の子の目はハートになっていた。

一部始終を見ていたオータムは呆然としているジークの肩をポンポンとたたいた。

「オータム…」

「何も言わないでください。こんなもんですよ…今日は仕事終わったら飲みますか？」

「うん…」

歌が上手になりたい

弟のロスに元医療魔術研究所副所長のザックス、診療所創設者のガラのおかげでジークの仕事は昔よりも格段に楽になっていた。弟子たちも中々成長していて、診療所は本当に順調だった。

ジークには暇な時間がかなりできたので、本格的に歌を趣味にするべく活動を始めた。

ある時、ジークの部屋に見知らぬ女の人が入ってきた。

「ジークさんですか？」

「はい。そうですが…患者さんの受付はあちらですよ。」

「いえ…違うんです。私、歌手のテノーと言います。今日はジークさんのレッスンに伺いました。」

「えっ！あなたがテノーさんですか！よろしくお願いします。」

ジークはそう言ってリズムに乗り、歌い始めた。

テノーはジークの歌を聞くや否やこう言った。

「…手ごわいですね。」

2時間後…

「らららららー！ー！ー！」

「ちがー！ーう！何度言ったらわかるんですか！ー！」

「ららっららー！ー！ー！」

「ちがーう！ー！ー！」

4時間後…

「ららららららー！ー！ー！」

「なんで言っても治さないんですか！治さないなら私帰りますよ！

！」

「らららあららっらー!!」

「違う!! つかひどくなってるし!」

6時間後…

「ららあらららー!!!!」

「…今日のレッスンはここまでにします。」

「テノー先生ご指導ありがとうございます。一生懸命やりましたがどうでしたか?」

「伸びしろがない…」

「えっ?」

「あなたは歌の才能がありません。最初は下手だと思いました。ですが、あなたはタダのへたくそじゃありませんでした。今後あなたは少しも上達しないでしょう。」

「そんな…」

「才能があなたには全く感じられません…残念ですが、別の趣味を探した方がいいでしょう。」

「…」

その夜ジークは人知れず泣いた。

特別シフト

「ジーク先生！また、バラ先生がお酒を飲んだまま治療してしました！！」

バラと一緒に治療を行っていた弟子がジークに報告してきた。

「またか…わざわざありがとうな。」

「ジーク先生…こんなこと言いたくないんですけど、バラ先生は…」
「わかってるから…言わないでくれ…」

次の日、ジークはバラが診療している部屋へ入って行った。

「バラ先生…酒臭いですよ。酒飲んでますよね？」

「ちよつとだけだ！ちよつとだけ！！治療には影響ない。」

「…影響があるうとなかろうと診療所ではお酒は控えてください！」

「…テメー！！誰に向かって口聞いてんだ！俺はこの診療所創設者だぞ！」

「…」

「お前に医療魔術のイロハを教えてやったのも俺だし、色々世話してやったのも俺だ！今後は口のきき方に気をつける！」

「…」

その夜、オータムの部屋へジークが入って行った。

「オータム…ちよつといいか？バラ先生のこと話があるんだけど

…」

「はい。あの人も困ったもんですね。」

「…昔はあんなにめちゃくちゃでもなかったよな？」

「そう…ですね。」

「もともとはこの創設者だし、高い志を持った凄い人だったんだよな…」

「…はい。」

「やっぱり…あの人が歪んだ原因は俺とガラ先生かな？」

「ジーク先生とガラ先生が悪いわけではないと思います。ただ…原因はそこかと…」

「そう…だよな…」

「…この創設者だろうと…ジーク先生なら追い出せると思います。何せ5年間一人で頑張ってきたのはジーク先生ですから。」

「いや…ロスらとローテーション組んで監視するよ。ミスしたらフォローできるように…お前ら助手たちには迷惑かかると思うけど…いいかな？」

「…私はジーク先生の判断に従います。」

「…悪いな」

バラ先生をフォローする特別シフトが組まれた。

記念日（１）

「オータム。１週間後ってどうする？」

「えっ！もしかして…覚えてたんですか？」

「え、うん。一応、ロス、ザックス、バラ先生、ガラ先生集めてやると思うてるんだけど…」

「いや…本当にありがたいですけど、みんなに集まって貰うほどのことでは…」

「じゃあ、俺とオータムだけでいいか？」

「ええっ！は、はい！！わかりました。」

「時間は…１９時くらいでいいかな？」

「…わかりました。楽しみにしていますので。」

「えっ？ああ、楽しみだよな。場所は当日言うから。じゃあそーゆーことで。」

オータムが部屋を出ていった後、ジークは呟いた。

「新助手の面接が楽しみなんて…やっぱりオータムたち助手の仕事は大変なんだな。」

一方、オータムはニコニコしながら廊下を歩いていた。

すれ違う助手のアリーがオータムに尋ねた。

「オータムさん、何かいいことあったんですか？」

「えっ！いや…実はジーク先生が１週間後のことを覚えててくれてね。」

「１週間後？…その日って何の日でしたっけ？」

「いや…完全にプライベートなことなんだけど、１週間後は…私がこの診療所で勤めて７年目のよね。」

「へええ…そんな日を覚えてるなんて…ジーク先生やりますね！」

「毎年やってるわけじゃないんだけど、１年目、３年目はロス先生が主催でやってくれてね。５年目はサリーがやってくれてたから実

はひそかに期待してて……」

「なんにしても、嬉しいですよ。」

「うん！」

オータムは無邪気な声でうなずいた。

6日後……

ジークと助手が診療室で治療していると、助手がジークに話しかけた。

「ジーク先生！明日ですね。」

「明日？ああ、オータムに聞いたの？そうだよ。」

「オータムさんの記念日を覚えてるなんて、中々やりますね？」

「記念日？何の？誕生日なら覚えてるけど……」

「えっ！だって明日はオータムさんがこの診療所に働いてちょうど7年目の日でしょ？」

「……何それ？明日は新助手の面接日だよ。」

「……！もしかしてオータムさん凄い勘違いしてるかも……」

「そーかー。だからオータムと話した時、嬉しそうにしてたのか……」

「なんでそんなに冷静なんですか！？このままじゃオータムさんがつかりするじゃないですか！」

「しょーがないじゃん。勘違いなんだから！正直に話せばわかってくれるだろ。」

ジークは休憩時間にオータムの部屋へ行った。

ジークが部屋に入ると、オータムはいなかった。

しかし、いかにも高級そうなドレスがきれいにハンガーに掛けられていた。

ジークはすぐにオータムの部屋をあとにし、診療室に戻り、アリーに言った。

「どーしよー……めっちゃめっちゃ気合い入ってる。」

「どーするんですか！どーするんですか！どーするんですか！？オータムさんめちゃくちゃガツカリするじゃないですか！？」

「でも！…だいたいそんな日おぼえてるわけないじゃん！！」
「…最低」

記念日(2)

「どーしよー！非常に困った。プレゼント探す時間なんかないよ。」
「とりあえずロス先生に相談しては？」
「…そーだなー。」

ジークの仕事の時間が終わり、ロスが交代勤務で診療室に入ってきたので相談することにした。

「ロス…オータムのことなんだけど…」

「ああ…さっき話したよ。新助手の面接のことでしょ？」

「えっ！？…オータム何か言ってた？」

「いや…『兄さんに新助手の面接の時間聞いたけど、19時からなら、俺も参加できるから行くよ』って言ったら何か考え出して…」
「それで！？」

「いや…『わかりました』って笑顔で言ってたけど…」

「…どーしよー。完全に怒ってる…」

「何かあつたのかい？」

「いや…実は明日はオータムがこの診療所に勤めて7年目なんだ…」

「うん。知ってるよ。」

「えっ！お前知ってたの？」

「だって1年目と3年目は祝ってたでしょ？今回も驚かせてやろうと思って内緒で数人の弟子たちに密かに準備させてるよ。」

「なーんで俺にも言ってくれないんだー！？」

「いや…特に理由はないけど…兄さんは多忙だし助手には口が軽いやつがいるし…」

「そーかー…わかった。ありがとうな。」

ジークは結局オータムに謝るしかないと思い、部屋へ行った。
ノックしたが返事がない。

部屋へ入ると、オータムはベッドに包まっていた。

「オータム…あのさ…」

「なんで返事がないのに入ってくるんですか！？出てってください
！」

「明日のことなんだけど…」

「新助手の面接が19時からあるんでしょ？ちゃんと覚えてますよ
！」

「いや…記念日のことなんだけど…」

「…誰から聞いたんですか？」

「…アリーから…」

ジークは弱弱しそうな声で言った。

すると、オータムは起き上がりジークを見た。

ちよつと目には泣いた跡があったような気がした。

「ごめん。」

ジークがそー言うのと、オータムは手を両手に重ねて思いっきりみぞ
おちに両手をぶち込んだ。

「あごは……！」

ジークは思わずそんなうめき声がとびだし、みぞおちを抱えてうず
くまった。

オータムはうずくまっているジークを見て言った。

「これで許してあげます。」

ジークは苦しみながらも言った。

「ちゃんとパーティーは開くから…」

「私は……パーティーをして欲しいから怒ってるんじゃないんで
す！」

「じゃあ…なんで…」

「もーいい！！出てってください。」

オータムはそっぽを向いた。

その時のオータムの肩は震えていた気がする。

突然、ジークはオータムの肩を抱いた。

オータムはびっくりして言った。

「ば、なななにするんですか!？」

「お前には本当に感謝してる。俺が今ここにいるのはお前のおかげだよ。」

「」

「ただ、こーゆー記念日とかには無頓着で…本当にごめん。」

「」

「」

「あ…もう少しこうしてもらっていても…いい…ですか？」

「」

「」

「」

それから2分くらい経った後、部屋にノックがした。

2人はノックにびっくりして即座に離れた。

結局、ロスは昼ごろにサプライズパーティーを開いて、オータムはとても喜んだ。

19時には新助手の面接があり、2人を採用した。

ジークとオータムはお互いを少し意識していたのか口数が妙に少なかった。

ザックスとリース

ある夜、ザックスは辺りを見渡ししながら、都会のベンチで座っていた。

そこに、助手のリースが来た。

二人はあたりを見渡しして誰もいないことを確認すると手をつないで歩き出した。

喫茶店で食事をしながら二人で雑談をした。

「まさか、君とこんなことになるなんてね…」

「はい。私もすごく驚いています。」

「でも…当分みんなには知られたくないよね。」

「同感です。知られたら面倒なことになりそうだし、ザックスさんは人気がありますから！」

そういうリースの個人的な見解を言ったが、ザックスはまんざらでもなさそうだった。

「でも…ザックスさんはいつかは…国に帰ってしますんですよね？」

「うん…でも当分先の話だから…ここで学ぶことは多いしね。」

「どんなこと？」

「まず、ジーク先生だね。ロス先生と肩を並べる人がこの世にいるなんて驚きだったよ。それに、ガラ先生も凄い人だね。あれだけの魔術医師はうちの国でも居るかいなかだね。本当に凄い場所で働かせてもらっているよ。」

「そうですね…本当に凄い人たちですよ。ザックス先生も含めて

…」

「こいつー！」

「ええー！本当のことだもん！」

「あと、なにより一番の理由は目の前にあるからね。」

「もー！！！！何言ってるんですか！？」

「いやいや、真実だから仕方ないよー。」

ラブラブな二人であった。

3か月後：

ロスがザックスの家へ行った。

ノックをする、ザックスが大きな声で言った。

「カモーンー!!」

ロスは部屋に入ると、まず、玄関にはバラの花びらがまき散らされていた。

奥の部屋に入ると、ザックスが裸で仁王立ちして待ち構えていた。

ロスは面を食らって叫んだ。

「お、お前！何やってんだ!!早く服着ろよ!!」

「す、すいません。まさか、ロス先生だとは。」

「誰がくると思ったんだ？」

「…いや、実はいつも僕は裸で過ごしていました…」

「…で、裸で人を出迎えるのか!？」

「…たまには皆を驚かせたくなりまして。」

「…変な趣味だな…辞めた方がいいよ。」

「…はい。」

「バラの花びらがまき散らされているのも趣味なの？」

「…バラの花がとにかく好きなんです!!好きで好きで!」

「ふーん。」

「と、ところで今日は何の用事でいらっしやったんですか？」

「いや、そーいえばザックスの家に行ったことなかったから。で暇

だったから。」

「…そーですか。」

「何か予定あった？」

「いいいいえ!!何もありませんとも!」

ロスはあたりを見渡した。

「化粧道具なんか置いてあるけど…」

「……!!そつそれは……」

「自分で使うのか?」

「……は、はい。」

「えっ!本当に自分で使うの!?!冗談で言ったのに……」

「……実は女装が趣味なんです。」

「そ、そうか……まあ趣味は人それぞれだしね。てつきり女性と暮らしているのかと思ったけど。」

しまった

ザックスは今頃気がついた。

別に相手がリースだと気づかれなければ女性と暮らしていることを隠さないでもいいことを。

しかし、ザックスはとんでもなく強情な人間なので今更訂正はできなかった。

ロスと言った。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。」

「は、はい。あのロス先生……このことは……」

「わかってる。誰にも言わないよ。」

「本当にありがとうございます。」

ロスは帰って行った。

30分後……

ザックスの家に誰かがきた。

ノックの音がしたのでザックスは言った。

「カモーーーン!!」

ザックスが裸で仁王立ちしていると、扉から人が入ってきた。なんと再びロスだった。

「ちよつと忘れ物して……だから裸で出迎える癖は治せつて。」

「も、申し訳ありません……我が国の伝統でして……」

弟子たちの様子

弟子たちが診療所に来て、そろそろ1年が経とうとしていた。優秀な弟子たちはすでに重症患者の治療も行っていた。

しかし、優秀であればあるほどジークやロスなどの壁が大きく立ちだかっていた。

ラリーもその一人だった。

ジークがラリーの治療に付き添っているとき、ジークがラリーに対して言った。

「見事だ。お前にはそろそろ魔術医師の免許をあげてもいいかもな……」

「……どこが見事なんですか。先生は同じことが1日に何千回とできるじゃないですか。僕はこの1回だけで魔法力をほとんど使ってしまった。」

「バカ！俺やロスがどれだけ患者を治してきたと思っている！君らとは治している患者数が違うよ。君たちも修羅場をくぐっていけば俺たちぐらいにはすぐになれるよ。」

「そうでしょうか……」

「絶対だ！」

ラリーが出ていった後、そばで見ていたオータムはジークに言った。
「ラリーを引き留めようと必死ですね。」

「ラリーは優秀だからな。自分の限界がどうしてもわかつちゃうんだろうな。」

「自分の限界を知っても、続けると？」

「あいつが知ってる限界なんてまだまだ甘いよ！限界はまだまだ先にあるんだ。それを知ったらきつとどっちが上かなんて気にならなくなるよ。」

次に教える予定だった弟子のサシャが入ってきた。

「ジーク先生！私だってそろそろ重症患者やれます。」

「ダメ！！絶対だめ！！」

「先生は私の才能に嫉妬しておられるんだわ！なんて醜い…」
オータムにジークが呟いた。

「ほらね。こーゆー何も考えてない楽天家が残ったりするんだよ。」

マザコンの秘密

「また、お母さん来たんですか!？」

ロスはいきなり言った。

「だってチャちゃんがいじめられてないか心配で……」

「あなたがこう頻繁に来ては皆から逆に変な目で見られてしましますよ。なんで毎日毎日来るんですか!？本人のためにも全くよくないことですよ!！」

「だって私チャちゃんが心配で……」

「いいですか!？今後チャとお母さんが接触するのは週で2回までとさせて頂きます。それ以外は一切この診療所には来ないでください!！」

「そんな……チャちゃんがいじめられて自殺でもしたらどうするんですか!？」

「一生あなたが付いていてはチャはいつまでもたっても成長しません。」

「でも……」

「わかりましたか!！」

「……わかりました。」

「……では今日はお引き取り下さい!！」

「ええっ!！今日からですか!？」

「はい!！」

「わかりました。」

30分後……

ロスによる診療講座中、何かに気づき、急にロスは壁に向かって呪文を唱えだした。

すると、チャの母親が姿を現した。

「お母さん！！透明になっただって駄目です！！」

「透明になって見守るぐらいいいじゃないですか！？」

「ダ・メです！！お引き取り下さい。」

2時間後：

ジークが見守る中、チャの重症患者の治療が始まった。

チャが魔法を掛けると、重症患者の傷は塞がっていった。

ジークは何かに気づき窓のそばにいる鳥に向かって呪文を唱えた。
すると、チャの母親が姿を現した。

「お母さん…なんでチャの代わりに呪文を掛けてしまうんですか！
？チャのためにならないでしょう！」

「だってだってチャちゃんができない風に思われるのは耐えられないんです！！」

「そんなことやってたらチャは何時まで経っても成長しないでしょう！！お引き取り下さい。」

そんなやりとりが後5、6回続いた。

そして2日後：

ザックスが見守る中、チャが重症患者の治療に呪文を掛けた。

すると、重症患者の傷が見る見るうちに治っていった。

「凄いじゃないか！！自力で治すなんて大したもんだ！！」

チャは頬を赤らめながら頷いた。

同じく弟子であるサシャがふざけてこんなことを言った。

「また、お母さんがどっかに隠れてるんじゃないのー！？」

周りからドツと笑いが起きた。

ザックスはサシャを睨み、こう言った。

「サシャ…私は一流の魔術医師だよ。私の目をかいくぐれる魔法使
いなんて…あれ…」

ザックスは何か違和感に気づきその場所に魔法をかけた。
するとチャの母親が飛び出してきた。

「いたーーーー！！」

その叫び声と同時に一段と大きな笑いが起きた。

チャの赤らめた顔が一気に青白く変わっていった。

そして、チャが突然叫んだ！！

「もーたくさんだーーーー！！」

そう言うや否や診療所を飛び出して行った。

「チャ、チャちゃーーーーん！！」

そー叫びながらチャの母親はチャを追いかけた。

2時間後…

結局、チャは見つからず、治療している者以外の皆で搜索すること
になった。

魔術医師で最年長であるガラがうなだれているチャの母親に話しか
けた。

「やれやれお母さん…今回は失敗しましたな。」

「…皆は私のことを多少過保護だと思っっているでしょうが…私は…
私は…」

「どれ…聞かせてはもらえないでしょうか？」

「…あの子は8年前に死にかけたことがありました。大戦が起きる
前でしたが、盗賊団と防衛隊との魔法弾に巻きこまれて…」

「あまりの傷にどの魔術医師たちも一斉に匙を投げました。私はこ
の子の命を一回諦めました。」

「8年前…」

「覚えてらっしゃらないでしょうね…奇跡の魔術医師がいるという
かすかな希望にすがって来た一人の母親のことなんて…」

「なるほど…そうでしたか…」

「九死に一生を得たあの子を…私はずっと守ってきました。またあの子の命を諦めることになるくらいなら…ずっとあの子を守っていいよって。」

「…不思議とチャは私にだけは心を開いてくれていましたね…なんで魔術医師になりたいかを聞いたことがあったんです。」

「…あの子はなんて？」

「『僕は今までずっと母さんに守られてばかりだった。これから母さんを守るような人になりたい』そうですよ。」

「…」

「子供の成長は著しいものです。やがてお母さんも息子さんに抜かれる日がやってくるでしょう。その日を心待ちにするのは…ダメですかな？」

「…」

「あつ、そうそういい忘れたことがありました。8年前にある子供を治療した時子供がこんなことをいっていたんです。『お母さんは大丈夫？』って。もしかしたらその子はお母さんを守ろうとして魔法弾にあたったのかもしれませんが…」

「…」

結局4時間後チャは見つかり、ガラ先生がチャをなだめていったんは落ち着いた。

チャの母親はそのことがあって以来あまり顔を出さなくなった。

あるガラ先生とオータムの治療の時、オータムはガラに向かって話しかけた。

「ガラ先生はやっぱり凄いですよね。あんなに自分のことをしゃべらないチャから色々と聞き出していたんですもんね。」

「いや…心は開いてくれたけど、何も聞いてないよ。」

「えっ！！じゃあ、あの話は全くの嘘なんですか！？」

「嘘じゃないよ…あの子の心がそう言っていたんだよ。」
そう言ってガラはオータムに笑いかけた。

サシャ　　ンの過去

・横に立っているエリーは最も愛している人で、50年後もずっと同じで・・・

その人はほんとにほんとに素敵な人で、ほんとにほんとにほんとに！！

いつからかそれが夢に変わってた。

でも、ずっと好きだったエリーの隣にいるのは親友のゲラーで・・・

・
サシャ　　ンはそんなことを考えながら、結婚式場にいた。

「ばか！！せつかくの友達の結婚式だぞ！！心から送り出してやらんと・・・」

そーは思っている中々それが頭から離れない。

「ここでなんと新婦のエリーさんから新婦のゲラーさんにサプライズが！！」

なんと手紙を用意してくれたそうです。」

ゲラーはびつくりしながらもうれしそうに立っていた。エリーさんが読みあげる

「ゲラーへ・・・最初に会ったときは今ここであなたが私の横に立っているなんて想像もしませんでした。最初のあなたはとても怖そうでなんか近寄りがたかったよ。でも、それはあなたが不器用だからだったんだよね。だんだんあなたのことが分かってきてあなたが本当はすごく優しく暖かい・・・」

大体こんな内容だったかな。確かにゲラーはいい奴だよ。でも「かつこいい」って言うのが抜けてないかな！！そこがないと好きにならないでしょ普通。だってやさしくて暖かい奴なら大多数がそーでしょ。俺だって君にはすごく優しくかったし、てか最初からやさしかったし・・・いやもうやめる俺！！せつかくの披露宴だぞ！！エリーが続けて読み上げる、

「私が親とケンカして家を出て行つたときも、一番最初に私を見付けてくれたよね・・・」

あの時はえらい騒ぎになったな・・・親から行方不明になったって連絡が来て、

36時間くらいぶつとおしで探したつけ・・・結局君がゲラーに手紙を送つてゲラーが迎えにいったんだよね。それを見付けてくれたというのならもう何も言うまい・・・（ゲラーは心配ないって探さなかったけどね！！）

ハ―ああ・・・自分でもこの性格がいやになる。せつかくの友達の結婚式にこないやなことをかんがる自分がさ！！

ゲラーが突然立ちあがり、大きな声で言った。

「ここで重大な発表があります！なんと私たちは子供を授かりました。名前はガラとつけようと思っています！」

「シャーンさん！！サシャンさん！！起きて下さい！！」
サシャンはガラに起こされた。

「授業の途中ですよ。今寝てもらつては困ります。」

「ああ、夢か…わしゃ夢を見とつたんじゃな…」

「…何の夢かは知りませんが、すごく悲しそうな顔してましたね…」

「…なに、一人の女性を諦める夢だったんじゃよ！ほっほっ…ガラ…大きくなったの…」

親父――！

診療所に見知らぬ年配の男性が入ってきた。

助手のアリーはその男性に聞いた。

「こんにちは。どうかされましたか？」

「あの…ジークとロスの父親のジャスという者ですが…」

「えっ！！ジーク先生とロス先生の！？すぐに連れてきますね！！」

10分後…

「父さん、一体どーしたんだい？」

「いやーたまには息子たちの顔をみないと思っただけ…元気だったか？」

ロスとジークは顔を見合わせた。

「父さん…何を企んでるんだい？」

「いや…何にもないよ！本当に今回はお前たちの顔を見に來ただけだよ。」

「そうか…」

「あつ！そうだそうだ…ついでに母さんからこれを頼まれていてな…」

ジャスは山のような絵を呪文で出した。

「…これは？」

「おまえらのお見合い写真だ！！みんないい人たちばかりだぞ！！」

「…どうせそんなこつたろうと思っただよ！！」

「よし！ロス、お前に任せる！」

「そんな…卑怯だよ兄さん！！順番から言ったら兄さんが先だろ！！兄さんがお見合いしなよ。」

「いや、俺はいろいろ忙しいしな…」

「俺だっている忙しいよ。」

2人がそうやって揉めていると、ジャスはぴしやりと言った。

「二人とも1つずつ選んで、お見合いしなさい。」

「…」

ロスとジークはどの人がいいかをお互いに探すことにした。

「ロス…この子なんかタイプなんじゃないか？」

「うーん。趣味が全然合いそうにないなあ…兄さんこの人は？」

「うーむー。お嬢様育ちがぬけてなさそうだもんね…」

「…」

「…」

二人とも中々決まらなかったが、お互いに2枚絵を選んで会うことにした。

レストラン「スプリングフェアリー」にて…

ジークはそわそわしながら待っていた。

すると、絵とは大分…いやかなり違う女性が目の前に立っていた。

ジークはさすがにこの人はないなと思い、また、外のドアの方を気にしだした。

しかし、その女性はジークの席にドシツと座った。

その女性が座った瞬間、ジークの持っているコップがかすかに震え始めた。

その斜めに座っているロスはとりあえず胸をなでおろした。

その女性は、ジークに向かって言った。

「…ロス先生ですか？」

その瞬間、ロスの椅子がガタツと音を立てた。

かたや、ジークは笑顔でロスの席へその女性を案内した。

「ロス先生…よろしくお願いします。」

「…こちらこそよろしくお願いします。」

ロスの持っているコップもまたかすかに震え始めた。

「…双子の姉も、もうすぐ来ると思いますので…」

今度はジークの椅子がガタツと音を立てた。

結局4人は会話も弾みいい友達になれたが、ロスとジークはその絵と全然違ったことは凄く納得がいかなかった。

くそ親父ー！！

ジャスが診療所に来て一週間が経った。

ジャスはジークやロスの診療の様子を見に来たり、待合室で患者と雑談したりしていた。

ジークとロスは父親が来た理由がいまいちハッキリしなかったのでお互いに首を傾げていた。

オータムが久々の休日にくつろいでいると、ノックの音がした。

ドアを開けるとジャスがいた。

「オータムさん…あなたに話があります。」

「はい、何でしょうか？」

「将来、あなたはどちらかの息子と結婚する気がありますかな？」

「結婚！…いやいや全然そんなことは考えていませんけど…」

「…そうですか…失礼します。」

アリーもまたくつろいでいると、ノックの音がした。

ドアを開けるとこれまたジャスだった。

「アリーさん…」

「は、はい。」

「将来、あなたはどちらかの息子と結婚する気がありますかな？」

「け、結婚ですか。…その…」

「わかりました。失礼します。」

サシャの部屋にもジャスは来た。

「…どうしたんですか？」

「あなたは、息子たちのどちらかと結婚する気がありますかな？」

「…そうですか…2人ともどうも私を見る目がいやらしいと思っていました。でも、私はあんな男たちに捕まるほど軽い女じゃありません。」

「せんよー!!」

「…そ、そうですか…」

結局ジャスは診療所中の女性に同じ質問をした。

その話を聞いたロスとジークがジャスの元へ向かった。

「父さん！一体何考えてんだよ!？」

「ロス、ジーク…父さんな…」

「な、なんだよ…」

「父さん…孫が欲しい…」

「…」

「…」

「…そんだけ？」

「うん。」

「うんじゃないよ!!なんだよそれ!!孫なんか父さんが頑張ったところでできないだろ!」

「…友達に自慢されて…悔しくてな…」

「『悔しくてな…』じゃないよ!何考えてんだよ!まったく…」

「でも、なかなか難しいことがわかったよ…誰もお前たちと結婚したいとは思ってないみたいだったよ。」

「…」

なんか少し傷ついたロスとジークだった。

赤ん坊

いつものように診療が終わり、オータムは後片付けをしていた。すると、いすの下から毛布にくるまった赤ん坊が出てきた。

「えらいこつちゃ……」

オータムは呟いた。

「どーする……」

「どーしましょう……」

「どーしょーか……」

皆がその赤ん坊の前に集まり、悩んだ。

オータムがその赤ん坊を抱いて、あやしている。

ジークがその姿を見て、呟いた。

「可愛いな……」

「本当ですね。私もこんな可愛い赤ちゃんを産める時がくるのかな……」

結局、その子は国の保育所に預けることが決まった。

オータムは少し悲しそうに言った。

「今日は……私がこの子と一緒に寝てもいいですか？」

その夜、ジークはなぜだか眠れなかった。

オータムと赤ん坊のことが気になって、部屋の前まで行った。

ノックしようとしたが、すぐ下手くそな……でも優しい子守唄が聞こえてきた。

ジークはそつとドアを開けた。

オータムがジークに気づいた。

ジークはオータムの横に座った。

オータムは赤ん坊の顔を見ながら言った。

「やっと寝ました…」

「可愛い寝顔だな。」

「はい。」

「…大丈夫か？」

「何がです？」

「なんか…様子変だったから。」

「…」

「…」

「ジーク先生は知ってますよね。私が孤児だったことは…」

「うん。」

「両親に捨てられて、それからずっと一人で生きてきました。この診療所に入った時もずっと一人だと思ってました。」

「…うん。」

「でも…やっぱり7年も一緒に過ごしていると、みんなが本当の家族のように思えてくる時があるんです。」

「…うん。」

「でも、みんなには本当の家族がいて…そんなところを見ると胸が…キューツと痛くなって…」

「うん。」

「…」

「オータム…でもな…」

そうジークが言いかけるとジークの首にこつんとオータムの頭が当たった。

ジークはオータムをそつとベッドに寝かせて部屋を出ていった。

結局、その子の母親は赤ん坊の元へ戻ってきた。

オータムはめっちゃめっちゃその母親を叱り、最後には少しさびしそうに赤ん坊を返した。

追憶

「…」

ジークが一人考え込んでいるのを見て、オータムが声を掛けた。

「どうしたんですか？ジーク先生。」

「いや…今頃ラーマさんはどうしてるんだろうと思って…」

「今更どうしたんですか？」

「…俺のことどう思ってたのかな…」

「だから今更どうしたんですか？」

「会いたいな…」

「…会えばいいんじゃないですか。」

「…うん。ちょっと会ってくるわ。」

「仕事終わってからにきなさいね！！」

仕事終わり…

ジークはラーマが働いている雑貨屋に行った。

ドア越しにラーマは笑顔で客に接客しているのが見えた。

やっぱり可愛いな

ジークは改めて思った。

そしてジークは雑貨店に入った。

ラーマは最初驚いた顔を見せたが、すぐに笑顔で言った。

「お久しぶりです。」

「久しぶり。」

「お元気でしたか？」

「…うん。ぼちぼちね。ラーマさんは？」

「はい。元気でやっていますよ。」

「そう…よかった…あっ今日は買いたいものがあって…」

そう言ってジークは適当に雑貨を買い込んだ。

その間、ラーマとの会話も弾んだ。
帰り際、ラーマがジークに言った。

「ジーク先生…私…結婚するんです。」

「…そっか…おめでとう。」

「ありがとうございます…」

「あのさ…いや…なんでもない…幸せにね。」

「はい。」

ジークは雑貨屋を去った。

翌日…

オータムがジークに尋ねた。

「結局、なんでラーマさんのところにいったんです？」

「別に理由はないよ…昔好きだった人に会いたくなって。」

「どうでした？久しぶりに会って…」

「きれいな人だっと思ったよ。」

「だから好きになったんでしょ？」

「まともに顔が見れたのは、最初の数回だけだった気がする。あと

はドキドキしてな…」

「恋愛経験小学生並ですものね。」

「うるさい。お前もだろ！」

「…」

「…」

二人してため息をついた。

カルチャーショック（なぜ抱きしめる？）

診療所に一人の男が入ってきた。

その男は受付に行くや否や受付の助手にハグをした。

「な、何するんですか！？いきなり！！」

「私、西の大陸で魔術医師をやっているモズといいます。放浪し医療魔術を学んでいましたが、この診療所の噂を聞きつけ是非ここで医療魔術を学ばせて頂きたいと思いやつて来た次第です。」

「そ、そうですか…」

助手は戸惑いながらも、ジークを呼びに行った。

ジークはモズの元にもうダッシュで駆けつけて言った。

「うちの病院は来る者拒まずだから！歓迎するよ！！早速実力を…ちよ、ちよっと…なんで俺をいきなり抱きしめるんだい？」

「ああ、言うのが遅れまして…西の大陸の私の国は挨拶にハグをするのが風習でして。この国ではそう言った習慣はないみたいですね。」

「ふ、ふーんそうなんだ…とりあえず、今ちようど治療してる最中だから俺の代わりにやってみてくれ。」

ジークはモズを代わりに治療させた。

治療の腕はまさに見事で、どの優秀な弟子より上だった。

かなりの魔術医師であることがわかったのでジークは即採用しようと声を掛けた。

「見事な腕だよ！！是非うちに…ちよっと…患者さんを抱きしめないで。」

「すみません。私の国ではこれが普通でして…」

「そ…そう。あの…採用なんだけどちよっと俺だけじゃ決めかねるから今日みんなと相談するよ。それまでは診療所の部屋に泊まつてよ。」

「わかりました。よろしくお願いします。」

モズは、ジークに熱いハグをした。

主な魔術医師、助手が揃った。

「すでに知っていると思うが、モズという優秀な魔術医師が採用を求めてきた。是非採用したいのだが、その…西の国ではすぐにハグする習慣があるらしくて…」

「…俺もされました。」

「私も。」

「俺も」

ほとんどの人がハグされていた。

「国の習慣だから…なんとか尊重してやりたいんだが、みんなどうかな？」

ジークの答えにみんなが頷きかけたその時、助手のアリーから信じられないような話を聞いた。

「でも…なんか友達になったらハグだけじゃなくキスもするって聞いたんですけど…」

「キ、キス!!」

全ての人がざわついた。

「よ、よし。キスは絶対にやめてもらってことで!」

その意見に満場一致で決定した。

モズの元へジークが話に行った。

「君を是非採用したい。」

「本当ですか!ありがとうございます。」

モズはジークに熱いハグをした。

「ただ…友達になったらキスをするって聞いたんだけど…それはちよつとこの診療所では辞めてほしいんだけど…」

「キスですか!?!いくらなんでも友達にそんなことはしませんよ。」

「そーなんだ。そーだよね。」

ジークの声が軽くなった。

モズは続けて言った。

「キスするのは親友と呼べるくらいの人だけですよ。ただの友達にはできませんよ！」

「…そーなんだ…あ、断つとくけどうちは上下関係は厳しいから！たとえば君と俺は先輩と後輩という関係で友達感覚で接しないように！そこだけ注意して！！」

「は、はい。わかりました。」

かくしてモズが採用されることとなった。

キス作戦

モズが診療所で働くようになってから、2週間が経った。

モズが挨拶代わりにハグをやたらとするので、周りの人はよく噂した。

「今日も私ハグされちゃった。しかも5回も!!」

「私なんか一日中助手だったから何十回もハグされちゃったわよ!」

「その習慣ちよつとおかしいわよね。」

「やめてほしいよね。」

周りの人たちがそう噂する中、一人だけモズをかばう人がいた。

「ちよつと!!国の習慣なんだからしょうがないでしょ!」

誰かと思えば弟子のサシヤだった。

サシヤはハグだけでなく、なんとか親友になってキスできないかなと考えていた。

そして、サシヤの親友になろう作戦が幕を開けた。

作戦1 困り作戦

「モズ先生!あのー教えてもらいたいことあるのですが…」

「モズ先生…」

「モズ先生…」

1日に100回くらいサシヤはモズに質問した。

そのたびにハグを受けた。

モズはいつも笑顔でサシヤに接した。

作戦2 相談作戦

「モズ先生…あのー相談があるのですが…」

「なんだい？」

「ずっと、変な人に付きまといわれて困ってるんです…」

サシャは架空のストーカーを作り上げてモズに相談した。

モズは本気でサシャを心配して可能な限り、サシャを家まで送った。

「中々、ストーカーは姿みせないね…」

「えっ！そ、そうですね…お、おかしいなあ。」

作戦3 お礼作戦

サシャは何かにつけてお礼をした。

「モズ先生！この前はありがとうございました。明日お詫びにおこりますよ。」

「いやいや俺は大したことしてないからいいよ。」

「…迷惑でした？」

「い、いやいや迷惑だなんてとんでもない。」

「よかったー！！いいお店知ってるんですよ！！仕事終わり迎えに来ますね。」

「…はい。」

その他さまざまな作戦をサシャは行って、モズの手を煩わせているがモズはいつも笑顔で接しているようである。

また、サシャの実力も飛躍的に伸びた。

第一回イベント会議

モズという優秀な魔術医師を採用したので、週に1回は休みがとれるようになった。

ジークは診療所で何かイベントをやりたいと考えていた。

早速、オータムに相談を持ちかけた。

「オータム、何か患者さんたちが喜ぶようなイベントをやりたいんだけど何かあるかな？」

「イベントですか…そうですねー…一度みんなを集めて相談しますか？」

「そーだな。こんな時間が作れるなんて昔では想像さえできなかったな…あーワクワクしてきた！」

第1回イベント会議にて…

「えーみなさん本日は集まっていたいてありがとうございます。

何かこの診療所でイベントなどできたらいいなと思い、今日は集まっていたきました。何か意見のある人はいらっしゃいますか？」

「なんで、そんなことやる必要があるんです？」

「ちよつと…面倒くさいよねー…」

「ねー」

最初はそんな意見が目立ったが、ジークがその意見を言ったやつを凄い形相で睨むので、その人たちは次々と口を閉ざした。

そんな中、モズが口を開いた。

「私の国では、裸祭りというものがあるのですが…」

そういったとき、女性陣が凄い形相でモズを睨んだ。

男性陣は賛成したかったが、あまりに女性陣の顔が怖かったので賛成する勇者はいなかった。

「合唱なんてどうですか？」

アリーが言った。

「合唱かあ……」

ジークや昔からいる助手はオータムを見た。

オータムは顔を赤らめたまま下を向いている。（歌が下手すぎるため）

合唱がなかなかいいんじゃないかと言っ意見が結構多かった。

「じゃあ合唱で決まりで。ダメだと思うひとがいたら手を挙げてください。」

誰もいなかったで、合唱に決まった。

「じゃあ、ピアノから……誰かピアノをやりたい人！！」

オータムと魔術医師のバラが手を挙げた。

「2人ともピアノ経験は？」

「ピアノ演奏者が魔術医師か……どちらの道に選ぶか迷った男だぜ！！俺は！！」

ピアノ演奏者を選べばよかったのに

かなりの人がそう思った。

かたや、オータムは恥ずかしそうに言った。

「私は……ゼロです。」

「じゃあ……バラ先生で決定です。」

指揮者選びの時も、オータムと魔術医師のザックスが手を挙げた。

しかし、オータムは同じく未経験者のためザックスが選ばれた。

「じゃあ、パートを分けようと思います。」

オータムがおずおずと質問した。

「……もう歌以外のパートはありませんか？」

ジークはさすがにオータムが可哀想になってきたので提案した。

「じゃあ……カスタネットを一人入れようか！！」

ジークのこの提案の意図を大多数の人が理解し、オータム以外の人には誰もいなかった……と思ったら一人いた。

サシャである。

「私、昔カスタネット奏者だったんです。カスタネットには絶対の自信があります。」

ジークは半信半疑で質問した。

「カスタンネットってそんなに違いあるのー？ちょっとやってみてよ。」

サシャはカスタンネットをもつと、カスタンネットってそんな音がでるんだーみたいな素晴らしい音を繰り返し広げた。

「…うまいね…じゃあサシャで決定で。」

第一回イベント会議はそうやって幕を閉じた。

今回は2週間後に開く予定をした。

女性たちの休日（午前）

「ひまねえ……」

「暇だわ……」

「暇ですね……」

助手のアリーとオータムとサリーは休日カフェテリアでくつろいでいた。

「最近人手も足りてて、大きな合戦もないし、いいことなんですけどね……」

「こつも、忙しい時と暇な時の落差が激しいとねえ……」

「あー……なんか面白いことないのかなあ……」

「オータムさん、最近マークさんとはどうなんです？」

「んー……何にもないわよ。」

「まだ、付き合ってるんですか？」

「んー……わかんない。」

「何がです？」

「最近会ってないし、連絡も来ないし……」

「さすがに愛想尽かされたんじゃないです？」

「……そうかも……サリーはなんかないの？」

「……私は全然ないですよー」

「なんかあの人いいとかないの？」

「あーガラ先生とか優しくて素敵だと思うんですけどね……」

「が、ガラ先生！？妻子持ちじゃないの！！ダメダメー！！」

「冗談ですよー。アリーさんは？ロス先生とその後どうなんですか？」

「うー……ん。何かしら思ってはくれていると思うけど……」

「けど？」

「なんか……オータムのこといつもチラチラ見てるんだよねー。」

「……アリー……私本人の前で……それ言う？」

「いいじゃん。今日は無礼講ってことで！昔何かあったっていうんだけど本当に何かあったの？」

「…振った…」

「やっぱりかあ…それでロス先生留学したの？」

「うん…でも、ロスがいなくなってから発狂しそうなくらい忙くなったから私めっちゃめっちゃ怒っちゃって…」

「でも、フラれた女と一緒に仕事はきついでしょ！？しかも、10代で…」

「まあ…ね。」

「でも、ロス先生を振るなんてもったいないよねー。かつこいいし、優しいし。」

「人には好きなタイプってもんがあるでしょうが！」

「話変わりますけど、アリーさんもよく頑張れましたよね！！助手や弟子の先生たちから総スカンくらって！！」

「まあね…」

「アリー…一言相談してくればよかったのに。」

「あの時は…ね。オータムはなんかロス先生を嫌ってるみたいだったし、サリーは…ね。」

「なんですか！？」

「恋愛ごとで相談してもね…」

「なんですか！それ！！私だって恋愛で悩んだりもしますよ！！失礼な！」

「…ごめんごめん。」

女性たちはこうやって休日の午前を過ごした。

女性たちの休日（午後）

「ひまねえ……」

「暇だわ……」

「暇ですね……」

「あつ。あのうちよつとかつこよくないです?」

「そーねー。まあまあかな。」

「ちよつと、暗そうじゃない?」

「オータムさん……理想高すぎですよ。」

「何よ! その嫌味は!!」

「じゃんけんで負けた人があの人に声をかけるってのはどうです?」

「えーやだあ。」

「別に私あの人に興味ないもん。」

「問答無用! じゃあんけん……」

「ちよつと!」

「やだやだ! 私出さないからね!!」

「ポン!!」

「……」

「……」

「はい。オータムさんの負け。」

「行かないって言ってるじゃないの!」

「じゃあ、なんで出すんですか?」

「うつつ」

「オータム負けたんじゃしょうがないんじゃない?」

「アリー……勝ったからって……」

オータムは渋々座っている男に声をかけに行くことになった。

「あの……」

「はい?」

「今って……何やってるんですか?」

「ああ…ちょうど暇になったんで本でも読んでたんですよ。」
「そーなんですか…」

「…」

「…」

「…」

「…失礼します…」

オータムは顔を真っ赤にしながら戻ってきた。

「全然会話弾まなかった…」

「見てて分かりましたけど。もっと自分から話題振らなきゃ!!」

「何を話していいのやら…」

「分かりました!!私が手本見せますから!!」

「…やめとけば?」

「なんですか!アリーさん。私じゃ無理って言うんですか!?!」

「別にルックスとかは問題ないんだけど、あなたってナンパ下手すぎるじゃない?」

「し、失礼なこと言わないでください!!行きますよ!!」

今度はサリーが座っている男の元へ行った。

「ハ―イ。何してるんですか!?!」

「本を読んでたんですよ。」

「軟弱者!!」

「へ…」

「な―んちゃって…あはは。」

「…?ははは。」

「何の本読んでたんですか?」

「『風の星』っていうタイトルなんだけど…」

「あー!私読みました。なんで主人公死んじゃうんですかねえ。まさか、マコが犯人だとは!」

「な、なんで小説の結末はなしちゃうんですか!まだ、読んでないのに!」

「あ、すいません。まーでも対して面白くなかったし、これ以上読

んでもねえ……」

「もーいいです！さよなら！！」

男は立ち上がり去っていった。

サリーはすぐごと戻って行った。

「どうだった？何か結構話してた気がするけど？」

「……ちよろいですね！！あの男はもう私の物ですよ！！！」

「ホントに！なんかメチャメチャ怒ってたような気がするけど……」

「全部計算のうちです！ご心配なく。今度ここに来た時が私の実力を思い知ることになりますよ！！！」

「ふーん」

その男は今後この喫茶店に現れることはなかった。

男たちの祝宴

「それじゃあ、カンパニー！」

「カンパニー！！」

ジーク、ロス、ザックス、ガラ、モズで居酒屋で飲むことになった。

1時間後：

「いやー！たまには男だけで飲むっていうのもいいもんだな！」

「診療所は女性の方が多いからなかなかこういう機会もないですもんね。」

「あいつら絶対調子に乗ってるよ！！アリーなんて…俺のロス先生となれなれしくしゃがって！」

「ザックス…序盤から飛ばしすぎじゃない？」

2時間後：

「でも、診療所の助手ってきれいな人多いよね。」

「特にオータムさんは凄い美人ですよね！」

「モズ先生はオータムの昔を知らないから…」

「いや…昔も今も性格いいぞ…あいつは」

「ガラ先生がいなくなっってから本性を現し始めたんですよ。ロスがいなくなっからはもう…何度殺されかけたことか！！」

「兄さん…迷惑かけたね。」

「いやいや、しょうがないよ！！でも…今みんながいてくれて本当に幸せだよ！！」

「ジーク先生は今の仕事を何年間も一人でやってた時期があるんですよね？」

「モズ先生聞いてくれるか…俺の苦勞を…」

3時間後…

「でね…ある時思い立って弟子をとろうとしてね…」

「ジーク先生…その話5回目です…」

「あ、そうか。じゃあ別の話を…でね…ある時思い立って弟子をとろうとしてね…」

…地獄だ

モズは素直にそう思った。

ジークをモズに任せて、ロス、ザックス、ガラの3人は話していた。

「ロスは弟子と助手の中で誰が一番タイプなの？」

「うー…ん。アリーかな…」

「でたでたロスは。自分を想ってくれてるからって…」

「そんなんじゃないですよ！！やっぱり一番話しやすいですし…」

「昔はオータム一筋だったのにな…結局フラれたのか…」

「…ほつといてください。オータムは昔から好きな人がいましたから。」

「まあ…おまえの立場を考えると、診療所にいたなくなる気持ちもわからなくもないかな…」

「まだ、10代前半ですからね…諦めるってことを知らなかったんですよ。」

「…で、諦めはついたのか？」

「ええ、凄いいい男になって、迎えに来るつもりでしたけど…」

「ロス先生はもの凄いいい男ですよー！」

「ザックス、ありがとう。もう飲むな。ガラ先生は誰がタイプなんですか？」

「俺は妻一筋だもん。」

「いやいや、じゃあ、ワンナイトラブするなら？」

「うーん。サリーかなあ。」

「い、意外な人選ですね。」

「性格がサバサバしてるから後腐れなさそうじゃん？」

「結婚してる人の考えって時々怖い…妙にリアルだ。」

「ザックスは？」

「お、俺ですか？…リ、リースなんか可愛いんじゃないかと…」

「あー、リースね。でも噂話が凄いいもんなあ。」

「いざというときはあんまり話しませんよ！！」

「…詳しいじゃん。仲いいの？」

「いえ…別に…」

こうして夜はふけていった。

どこがおかしい？

ジークは最近調子がおかしいと感じていた。

たまに治療中、心がドキドキして間違うことがよくあった。

ある診療中…

「ジーク先生…何ボーっとしてるんですか！？」

「お、おおそうだったな…」

「ち、違いますよ！！その箇所はもう治したでしょ！」

「す…すまん。」

オータムがジークを心配して言った。

「ジーク先生…どこか調子悪いんですか？今まで一回でもそんなことやらなかったでしょ？」

「いや…大丈夫だよ…大丈夫…」

また、ある診療中…

「ガーゼとって！」

「ちよつと待つて下さい…」

「いいよ。俺取るから。」

「いや、私取れますから。」

オータムとジークの手が重なるとジークは顔が真っ赤になった。

ジークは思わず手を払いのけた。

「す、すまん！！」

「…？はいガーゼ！」

ジークはガーゼをとり、噴き出た汗を思わず拭いてしまった。

「せ、先生！！なんで自分の汗ふいてるんですか！！」

「おわあ…し、失礼しました！！か、代わりのガーゼとって！！」

またまた、ある診療中…

「ジーク先生とオータム先生はいつみても息がぴったりだねえ。」

よく被災する患者がそう言った。

オータムは笑顔で言った。

「まあ、付き合いが長いですからね…お互いの思っていることは大
体分かりますけどね。ね、ジーク先生!!」

…」

ジークは顔を真っ赤にしながら後ろを向いていた。

「…?どうしたんですか?」

助手たちの休憩時間中…

オータムが心配そうに言った。

「ジーク先生…スランプかしら…最近ミスが多いんだよね。」

アリーが言った。

「そう?ジーク先生が診療中ミスなんか一回も見たことないけど。」

「私も」

「私もです。」

オータムが首を傾げていった。

「昔から一緒にやってきたけど全然ミスしない人だったのに…なん
でかねえ…」

「オータムさんの時だけミスするって変じゃないです?何か怒らせ
ることやっただんじゃないですか?」

「えー!…特に思い当たらないけど…」

「ビビらせることとか…怖がらせることとか!…」

「あたしゃ怪獣か!…ないけどなあ。」

恋…しちゃってる？

ジークと助手のアリーの診療中、ジークがアリーに言った。

「あのさ、ちょっと後で相談があるんだけど…仕事終わったら話してもいい？」

「はい。大丈夫ですけど…」

仕事終わりに…

ジークがアリーに話しかけた。

「最近、オータムってさ何か変わった？」

「いや…全然そんなことないですけど…」

「そう…」

「どうしてです？」

「いや…最近オータムをまともに見れないっていうか…」

「それって…ジーク先生が変わったんじゃないですか？」

「…どういう風に？」

「それって絶対こ」

「わー…言わないでくれ！！」

「な、何ですか！？」

「薄々俺もそうじゃないかとは思ってるけど、そんなんじゃない仕事に
ならないじゃん！！」

「まあ…そうですね。」

「アリーはどうやってロスと仕事してるの？」

「私たちは大人ですから。そういったコントロールはわきまえてる
つもりです。」

「俺らだって十分大人だよ！！」

「オータムとジーク先生は子供です。少なくとも恋愛では14歳レ
ベルです。」

「うつ…」

「二人とも仕事ばかりでまともな恋愛なんて一つもしてなかったんでしょ!?!」

「失礼な…ラーマさんと…」

「食事行っただけでしょうが!! あんなもんじゃないんです! 恋愛つてのは!」

「じゃあ、どうしたら…」

「きつと、ずっと忙しかったもんだから、急に時間ができて…自分の隣を見てみたんでしょ。そしたら凄く美人で、ジーク先生にずっと付いてきていて、恋人もいない人がいる。恋にも落ちますよ。」

「あー! ー! ー! いい、言いやがった。」

「いいましたとも!! オータムがかわいそうですよ! ずっと恋愛対象外で見られていたのに急にそんなこと思われるなんて!!」

「… 厳しいこと言うよなあ… どうしよう…」

「そんなこと自分で考えなさい!! いいですか!?! あなたの気持ちにもっと素直に向き合ってみたらどうなんです? 仕事のこととか考えないで…」

「…」

「オータムはずっとあなたの事を考えています。それは… 仕事上だけかもしれないですけど… あなたのことをずーっつと!」

「…」

「ジーク先生… あなたもオータムのことをもっともって考えなさい。それでもオータムがジーク先生を想っている1%にも満たないんですから…」

「…」

ダンスパーティー

イタリー王国でダンスパーティーの知らせが来た。

診療所にも招待状が届いた。

男性陣は全員招待状を受け取った。

基本的には男女の2人で一組なので男性は女性を誘わないと行くことができないし、

女性は誘われないと行くことはできない。

今回は既婚者以外の男性は診療所の女性を連れていくことにした。
(できるだけ多く参加するために)

ロスの場合：

ロスはアリーに話しかけた。

「あ、あのさ…今度ダンスパーティーがあるんだけど…」

「は、はい。」

「一緒に…行かない。」

「は、はい。喜んで！」

ザックスの場合：

ザックスは皆に聞こえるように言った。

「誰も誘う人がいないから、しょうがないからリースでも誘おうかな…！」

リースもまた大声で言った。

「ダンスパーティーに行きたいからしょうがないからこの誘い受けるとするかあ…！」

バラの場合：

「俺はダンスパーティーなんてガラじゃねーよ!!」
そう言ってお酒を飲みながらみんなの前で招待状を破った。

モズの場合…

サシャがモズの前に立って言った。

「私…ダンスパーティーって言ったことないんですよ…もし、誰も誘ってくれなかったら…私ショックで自殺するかも…」
モズは慌てて言った。

「さ、サシャ一緒にダンスパーティー行こうよ!!だから死ぬなんて言わないでね。」

ジークの場合…

オータムがジークに言った。

「ジーク先生は誰を誘うんですか？」

「お、俺!?!…うん。」

「…?どうしたんですか？」

「オータムはダンスパーティーって行きたい？」

「私は…いまいちだなあ…ダンスも踊ったことないし…別に負け惜しみとかじゃないですよ!!」

「うん…知ってる。」

「…本当にどうしたんですか?最近どこか変ですよ?」

結局、オータムを誘えなかった。

ダンスパーティー（2）

ダンスパーティー前日…

アリーはジークに話しかけた。

「結局、オータムは誘ったんですか？」

「…いや、誘えなかった。」

「何やってるんですか！！」

「だ、だって…」

「だってじゃないでしょ！すぐに誘ってきなさい！！」

「は、はい。」

ジークはオータムの元へ行った。

「ジーク先生？どうしたんですか？」

「うん。………あのさ…」

「何ですか？」

「…いや、何でもない。」

「先生、本当に大丈夫ですか？」

結局この時も誘うことができなかった。

アリーに会うと怒られるので、極力会うのは避けた。

でも、すぐに見つかってしまった。

アリーはジークがまだ誘ってないのがわかると激怒した。

「何で…何で一言が言えないのよ！！この意気地なし！！あんなんか恋愛する資格ないわよ！！」

「」

「…」

ジークはシュンとした。

アリーは怒りをなんとか抑えながら言った。

「ジーク先生、言わないと！この先ずっと気持ち隠していくつもりですか？」

「…アリーに言われた通り、ずっとオータムのこと考えてみたよ。俺、俺あいつのことが好きだよ。でも、俺…あいつがいない人生なんて考えられないんだ。だから…急に言うの怖くなって…だってずっと一緒に過ごしてきて…」

「先生…フラれたっていいじゃないですか。それは新しい始まりってことですよ。このままじゃジーク先生も…オータムも前に進めない。」

「…」

結局、この日もジークはオータムを誘わなかった。

バカみたい

ダンスパーティー当日…

城では各国のセレブがぞくぞくと呼ばれていた。

みんなタキシードやドレスを新調したが、着慣れていないので若干浮いていた。

ダンスが始まり、みんなが踊り始めた。

診療所にて…

「そろそろダンスパーティーの時間ですね…」

オータムが呟いた。

ジークはオータムの呟きを無視して一心不乱に治療していた。

「ジーク先生…今日は気合い入ってますね。」

オータムはびくりして言った。

いつものペースの倍近くで飛ばしていた。

夕方…

治療を全員終え、ジークは弟子に指示して後は任せた。

ジークは一回深呼吸して言った。

「オータム…一生の願いがあるんだけど…」

「一生の願いって…いきなりなんですか？」

「ある女の子と一緒にドレスを買いにいつて欲しいんだけど…」

「なんだ…そんなことですか…いいですよ。どこにいますか？」

「街のパリスホテルの前で待ってるから、よろしく!!」

「…お金はもちろんジーク先生持ちですよね？」

パリスホテルにて…

オータムはパリスホテルの前まで行くと、一人の女性が待っていた。その女性はオータムを見ると、近づいてきた。

「オータムさん？」

「はい。もしかしてジーク先生の？」

「はい。じゃあ、行きましょうか…」

二人はホテル内にある高級ブティック店に入り服を探し始めた。

「オータムさんは自分の欲しい服がありますか？」

「私だったら断然これを選びますね。めっちゃめっちゃ高いですけど、お金ジーク先生出すんだから。」

そういつて、冗談交じりに笑った。

「分かりました。でも、私はこれにします。」

「いいんじゃないですか？」

「オータムさんはこれを買って下さい。ジーク先生には私から言っておきますから。」

「えっ！！いいんですか？やったあ！！じゃあ、遠慮なく…」

「試着してもいいですか？」

「分かりました。私も試着しよーっと。」

二人は試着した。

「ぴったりだ！」

オータムがそう言つて喜んでいると、その女性は言った。

「ちょっと、こっちに来てくれませんか？」

そう言つて、オータムの手を引いた。

オータムは訳が分からないままついて行つた。

そして、ある一室に入るとジークがタキシードを着て待っていた。室内はまるでダンスパーティー会場のような部屋で静かな音楽が流れていた。

ジークはオータムの前まで行つて、手を差し伸べて言った。

「僕と…僕と踊っていただけませんか？」

オータムはあまりの展開に驚きついていけてなかったが、
やっと事態を把握すると、ジークに笑いかけて言った。

「ジーク先生…バカみたいですよ？」

そう言いながら顔を赤くして、ジークの手を取った。

二人のダンスパーティーが始まった…

オータムはジークに言った。

「私…今日のこと、一生忘れません…」

ジョギング

ロスとアリーのデート中にジョギングの話で盛り上がった。そして、今度一緒にジョギングをする約束をした。

ジョギング当日…

「ロス先生！」

「お待たせ。じゃあ、行こうか」

「はい。」

二人は走り始めた。

趣味のジョギングを二人並んで走れるなんて幸せ

こんなことを想いながら、アリーはロスの方をちらっと見た。

すると、ロスは猛ダッシュで何かに追われるかのように走っていた。

そして、見えなくなってしまった。

アリーはしばらく走っているとロスが汗だくで座っていた。

そして、アリーを見ると立ち上がり走る準備をした。

「あのロス先生…」

アリーは声をかけようとしたが、

ロスはそんなことはお構いなし、また猛ダッシュで走り去って行った。

…ジョギングってこんなのだっけ

アリーは思った。

1時間後…

この繰り返しがかれこれ4回続いた後、

アリーはジョギングを休憩しようとロスに声を掛けようとした。

ロスに声を掛けようとするが、ロスはアリーが近づくと走り去ってしまう。

なんだか、もうどうでもよくなったのでアリーはジョギングをやめ

て帰った。

4 時間後…

「アリー遅いな…」

ロスはまだアリーを待っていた。

嵐を呼ぶ女

診療所に一人の女の人 came。

その女性は受付まで行くと言った。

「すいません。ザックスはいますか？」

「ザックス先生ですか？ちょっと待って下さい。」

10分後、ザックスが来て、その女性を見るととても驚いた。

その女性はザックスを見ると、ザックスめがけて走り熱いハグをした。

ザックスは慌てて言った。

「お、おい！イリア：どうしてここに！？」

「どうしてって：全然帰ってこないから：私が迎えに来たんじゃない！」

たまたま、その受付はリースだった。

リースは笑いながら言った。

「ザックス先生：こんなに人前で熱いハグをしあうのはよくないんじゃないありませんか？」

「い、いや違うんだ！！これは……」

「は・や・く離れたらいかがです？」

ザックスはイリアを無理やり引きはがして、リースに聞こえるように言った。

「君とは俺が国を出る前に終わってたろう！？」

「あんな別れ方ってないわよ！！私は了承したつもりはありません！！」

「そんな……」

「と・に・か・く私はあなたが国へ戻らない限りずっとここにいるつもりですから……」

ロスが騒ぎを駆けつけて来た。

「イリア！！どうしたんだ！？こんなところで！！」

「ロス先生！！お久しぶりです。突然ですが、私を雇って下さい！！」

「いや、まあ君ほどの魔術医師なら大歓迎だけど……」

ザックスが横やりを入れた。

「ロス先生！！そんなこととんでもない！！イリアは私を国に連れて帰りたいだけなんです。」

「いや……でも、うちは来る者拒まずでやってるから。多分兄さんも賛成すると思うし……」

「そんな……」

ザックスはリースの顔をちらっと見た。

リースはただただ笑顔だった。

殺されるかもしれない

ザックスは本能的にそう感じ取った。

1時間後……

ザックスが凹みながら治療していると、ジークが来た。

「ザックス先生……話聞いたよ……落ち込んでるんだって？」

「いや……今回ばかりは……」

「君を和ますために一つジョークを作ったんだけど……」

ザックスはため息をついた。

嵐を呼ぶ女（2）

イリアの治療を見ると、即採用された。

みんなザックスの事情は気になるところだが、休みがやはり欲しかった。

ジークがザックスに言った。

「ザックス！！この人凄いじゃないか！！」

「はい…私と同じく副所長をやっていたので。」

「お前には悪いけど、採用させてもらうよ。ところで、イリアを採用したからって出ていかないよね？」

「私はロス先生がとどまる限りずっとここにいますよ。」

「よかったー。じゃあよろしく頼むね。」

イリアが雇われて1週間が経った。

イリアはところ構わずザックスにアプローチした。

リースはその光景を見るたびにイライラが募った。

あるイリアとリースの診療中、リースがイリアに話しかけた。

「イリアさんはザックス先生のどこが好きなんですか？」

「どこが好きって言われてもね…うーん…頑固なところかな…」

「まあ…確かに頑固ですね…」

「よく二人で喧嘩しててね…私も頑固だから。でも、やっぱり正面切ってぶつかりあえる相手だったからね。」

「…そうだったんですか。」

「あら、仕事中断しちゃったわね…さあ治療始めましょうか。次の人呼んできて！」

ザックスが仕事が終わって家へ帰るとリースが待ち構えていた。

ザックスはリースを見るなり言った。

「ち、違っただよ！！本当に前の国では別れたんだよ！！だから君

と付き合っただよー!」

「どうせ一方的に別れ切り出して、さっさと旅に出ちゃったんでしょ?」

「うっ…」

「そんなの相手からしたら別れたとは言わないですよ。理由も言わずに去るなんて…そもそもあんなに素敵な人を本当に好きじゃなくなっただですか?」

「…」

「もう…いいです。」

リースは出ていった。

レッツ！！ハロウィン

「とうとう来たな……」

「長かったですね……」

「今日は盛り上がるぜ！！」

イエエエエエー

診療所の年間行事ハロウィンパーティーが始まった。

保母さんの制服を着たアリーが、ジークに指摘した。

「ジーク先生……今年は動物シリーズは止めたんですか？」

「ああ、昔は忙しすぎてストレス貯まりすぎてたからな。正直はしやぎ過ぎてたよ。今日はバンパイアってとこかな……」

「いつになく逃げてますね……今年はオータムの目が気になるからじゃないですか？」

「ば、馬鹿なこというなよ！！……ちなみにオータムはどんな格好なの？」

「まだ、知らないですけど……」

その頃、ザックスはイリアと話していた。

「……可愛いじゃん。それって、東の民族衣装だよな？」

「あら、ありがとう。『キモノ』っていうんだって。」

2人で話しているとリースがどでかい斧を持って現れた。

「……その斧って本物？」

ザックスが震えた声で聞いたが、リースは笑顔で答えた。

「はい。連続殺人鬼『ジャイナソン』が持っていたとされる斧で浮気した女性をこれで殺しまくっちゃうそうですよ。」

「イ、イリア……じゃあ俺あっち行くから……」

ザックスはそそくさと逃げて行った。

一方、モズはサシャと話していた。

「サシャは黒魔術師が怖いくらい似合うね……」

「フフフフ……ありがとうございます。あなたもピエロの格好似合いますよ。」

「ピエロ知ってるの？この国ではサーカスやってないから知らないかと思っただけ……」

「……ちなみに何ピエロなんですか？」

「……何ピエロ？」

「ピエロでも色々あるでしょ？どのサーカス団のピエロなんですか？」

「いや、特に考えては……」

「どうりで。私がわからないピエロなんてあるはずないもんね。ツ
フフフフ」

「いや……その……」

モズは返答に苦しんだ。

オータムが少し遅れて入ってきた。

サリーがそれを見つけると、オータムの元へ駆けつけた。

「めちゃくちゃ気合い入ってるじゃないですか……！」

「そ、そう？へ、変かな？」

「いや、前の年はジーク先生と『シマウマ』と『豚』で笑い取った人とは思えないですよ。」

「あ、あのときは忙しすぎてハイになってただけよ……ジーク先生は？」

「あの人も普通にバンパイアですよ。あーあ、今年はつまーんないなあ。」

ジークがさりげなくオータムの方へ行き話しかけた。

「よ、よう。」

「ど、どーも。」

「…似合っじゃん。」

「ジーク先生も。」

「…」

「…」

「あ…今度お前が見たいって言ってた劇団が来るんだってさ！俺暇だから一緒にどお？」

「い、いいですね！私もちょうど暇だし…」

「…この後のダンス誰か決まってる人いる？」

「いえ…ジーク先生は？」

「いやーちようどいなくてさ。ちようどいいから踊ろっか？」

「そ、そーですね」

未だにぎこちな過ぎるジークとオータムだった…

マネー

ある夜、オータムが帳簿を見ながら、悩んでいた。

「うーん。おかしいなあ…」

ロスがそれを見つけて話しかけた。

「どうしたの？」

「いや…どうも最近赤字続きで…」

「この診療所は助手も弟子も魔術医師も増えたもんな…給料も破格だし。」

「まあ…この魔術医師は世界トップクラスですから。人材が逃げないためにも給料の設定には目をつぶるとして患者の数が最近減ってるみたいなんですよ…」

「いや…前より増えてるくらいだけど。」

「でも…ほら！！患者の収入が明らかに減ってる。」

「…それ…診察料自体減らしてるからじゃない？」

「いや、それは不是吗。私が経理の責任者なんですから！」

「…ごめん…」

「はい？」

「ごめん！！俺が診察料大幅に減らしちゃった…」

「えー！！な、なんで勝手にそんなことするんですか？」

「いや、勝手じゃないんだけど…兄さんと相談してね！その…兄さんは反対したんだけどちょっとこの診察料が高かったもんで口論になって…結局兄さんが折れてくれて…」

「この診療所は土地も都内の一等地で馬鹿でかいし、病院も最高の設備で作られてるんですよ！！税金だつてめっちゃ高いし…あれくらいの診察料が貰えないと、いつか破産しちゃいますよ！！」

「えっ！！だって、前見た時は小国の国家予算くらいあったのに…」

「病院を改築して以来大赤字がずっと続いているんですよ！！それでも、弟子や助手を育てるためだと思って…いつかは育って黒字にな

ると思つてたのに…この料金設定じゃ本気でヤバイですよ!!」

「ど、どうすれば!？」

「うちは慈善事業でやってるんじゃないんですから!!すぐ料金を高くします!!」

「そ、そんなあ…あんな料金じゃ誰も来られなくなっちゃうよ!!」

「お金を持つてない人は分割払いでもいいから払ってもらいます。

…道理で最近分割で払いに来る人が少ないと思いましたよ!!」

「…はい。わかりました。」

ロスがトボトボ歩いていると、ジークが話しかけた。

「どうした?何落ち込んでるんだ?」

「いや、それがさ…」

「こんな時にお前が元気になるジョークが一つあるんだけど…」

「…はあ…」

ロスは大きくため息をついた。

部屋を探そう！

ジークは街の人気雑誌を読んで、何やら考えていた。

そこへ、ロスが来て話しかけた。

「兄さん何見てるんだい？」

「いや…俺達つて2人で1つの部屋に住んでるじゃん？」

「そうだね。」

「そろそろ診療所の部屋から移ろうかと思ってさ…」

「なんで？どうせほとんど違う時間帯だし一人の部屋のようなものじゃない？」

「えっ、いや…イリアも入ったことだし、メンバーも充実してきて休みも取れるようになったから、これからロスにも一人の時間が欲しいんじゃないかって思ってた…」

「いや、別にそんなことはないけど…」

「と、とにかく暇なら部屋探し手伝ってくれよ！！」

「いいけど…」

二人は手分けして部屋を探すことにした。

「兄さんこれなんかどう？」

「…それはちよつと狭いんじゃないか？」

「一人だと十分なくらい広いと思うけどなあ…」

「予算は腐るほどあるんだからいいでしょうが！！」

「ふーん。じゃあ、もうちよつと広い部屋探すか…」

「ロス、これなんかは？」

「…うーん。いい部屋だとは思うけど、これ二人部屋だと思うよ。つてか書いてあるし…」

「…これにしようかな…ちよつと見に行かない？」

「いいけど…二人で住むの？」

「そんなわけないだろ！！」

「ふーん」

二人はお目当ての部屋についた。

部屋の案内人が部屋の説明を丁寧にしてくれた。

ジークが呟いた。

「ふーん。いい部屋だな。一目見た時からきにいつてたんだよねあー。これにしようかなあ……」

「はい。ここは当店自慢の部屋です。見晴らしも最高ですし、お二人で過ごされるのならこれ以上の部屋はないですよ!!」

「いや、一人で住むんだけど……」

「そ、それは失礼いたしました。」

案内人は深々と頭を下げた。

「ロス!!この部屋にするよ!!」

「うん。いいんじゃない?」

ジークはキャツシュで前払いですべてを払った。

帰り際案内人がジークに囁いた。

「失礼ですが…一人で住むという話は本当ですか?」

「な、なんなんですか!?関係ないでしょ!!」

「私、不肖ながら二人で住むお客様は間違えたことはございません。今後のお客様の対応にも関わってきますので一つ教えてはもらえないでしょうか?」

「一人でつて言ってるでしょうか!!」

ジークは逃げるように去って行った。

案内人は呟いた。

「絶対二人で住むな…もしくは住みたいと願っているか…」

試験

弟子たちも今かなりの実力を持っている。

そこで、魔術医師の試験を行い受かったものには魔術医師の資格をあげることにした。

第1次試験 知識問題

サシャ ンが開始早々寝だした。

試験官のジークはびっくりしてサシャ ンを起こそうとした。

しかし、どんなに頑張って起こそうとしても全然起きないのでやる気がないんだらうと諦めた。

しかし、試験終了30分前にバツと起きて鬼のように問題を解き始めた。

試験終了後、サシャ ンの答案をみるとすべてが埋まっていた。

サシャ ンはジークに謝った。

「わしゃ歳とつとるでな…30分ぐらいしか集中力が持たないんじやよ。寝てすまんかったの。」

「そうだったんですか…そういうことでしたら全然構わないんですよ…」

しかし、ジークにはもう一つ気がかりなことがあった。

チラッとしか見てないが、サシャ ンの答案の正答率が異様に低い感じがした。

ジークはそのことについては忘れることに決めた。

第2次試験 実践治療

実践の治療はみんな中々なものでほとんどの弟子が重症患者を何人も治せるまでに成長していた。

なかでも、飛びぬけて成長していたのはマザコンのチャだった。

母親離れたチャは30人も重症患者を治してなお余力があるように感じた。

ロスが、びっくりしてチャを褒めた。

「凄いじゃないか！！君が一番多く重症患者を治すことができたよ

！！」

「…はい。」

「筆記試験も問題ないし！！こりゃ魔術医師試験合格第一号はチャかもな！！」

「…ありがとうございます。」

「…暗いな！！もうちょっと嬉しそうにしてくれても…」

「…嬉しいです。」

「そ、そう…」

今回はチャを含む3人が魔術医師としての認定証を勝ち取った。

技術交流

この大陸には2つの大きな診療所があった。

1つはジーク達が運営する診療所、もう1つはより北にあるライラ診療所だった。

ライラ診療所はジークの診療所よりも人の数も、医療設備も格段によかったがジークの医療魔術の人材はトップクラスなので2つの診療所は同等の評価を受けていた。

今回、ライラ診療所から技術交流の打診があった。

ジークはそのことについてオータムと相談した。

「ライラ診療所から技術交流の打診が入ったんだけどオータムはどう思う？」

「今更何なんですか！！何度も私はライラ診療所に人がいないから助けてくれてお願いしていたんですよ。それなのに返事の一回もよこさなかったくせに…技術交流！？ふざけんじゃないわよ！！」

「オ、オータムさん…落ち着いて…」

「もちろんジーク先生は断りましたよね！？」

「い、いや…」

「こ・と・わ・り・ましたよね！？」

「そ、そうだね…断ろうと思うよ…」

「ならいいんですけど…！」

ジークは去り際、思い切って言った。

「ごめん！！もうオツケーって返事だしちゃった！！」

ジークはそういうや否や逃げた。

オータムはそれを聞くともうダツシュでジークを追いかけた。

その後、ジークがどうなったかは…

結局、ライラ診療所に格の違いを見せつけるということで精鋭のメンバーが選ばれた。

魔術医師はジーク、ザックス、ガラ
助手はオータム、アリー、リース
弟子は最近魔術医師になったチャ
このメンバーで行くことになった。

技術交流（2）

メンバーはライラ診療所にむけて出発した。

ライラ診療所までの道のりは5日ぐらいかかる。

その間、7人を乗せた馬車はずっと暇だったりする。

馬車内にて…

ジークは診療所を出て旅をするのが16歳の時以来だったので、めちゃくちゃテンションが上がっていた。

「ここでゲーム大会をやりまーす！！」

「ゲームなんて持つてきてませんよ？」

「ふっふっふそれがこのバッグに持つてきてるんだな…」

「あー！！そのバッグは医療器具入れるバッグでしょ！？」

「いや…だって手紙には医療器具は持つてこなくてもいいって書いてあったじゃん！！」

「そんなの私たちをバカにする罠に決まってるじゃないですか！！
『自分たちの医療器具も持つてこないなんて、何しに来たのかしらね！がはは』って！！」

「そんなアホな…まあ置いてきちゃったものはしょうがないから
人生成功ゲーム』やろ！！」

「知りません！！私は絶対にやりません！！」

オータムはすねて端の方でいじけてしまったが、

みんなは馬車内が暇なのでジークの提案に乗った。

1時間後…

「あー！！アリーが一番高い家買いやがった！！」

「フフフフ…私たちの家族は貴族ですからね…」

「ガラ先生…また借金ですか…」

「うつむ…こうなったら誰か子供を売らなければいけないのか…」

「まあ…ゲームですからね…」

「すまん！！！！ゲームとは言えども、子供を売るわけにはいかん！
！だって…だって自分の子供の名前つけちゃったんだもん…」

「ガラ先生…じゃあ俺がどっちか選んで貰っていきますよ！！どっちがいいかなあー…」

「頼む！！子供だけは！！子供だけは勘弁してくれー！！！」

「問答無用！！こっちの子を貰っていきますよ！！！」

「シラーーーーー！！！」

結構みんな白熱して盛り上がっていた。

技術交流（3）

馬車をずっと走らせて、やっと宿に着いた。

宿の外装は中々シャレっていて、みんな中はどうだろうと胸を膨らませた。

みんなが中に入ると、中のボロさにみんな驚いた。

一人の老人が受付から出てきて言った。

「よ、ようこそ…いらっしやいました。」

「は、はい。よろしく願います。」

男女すべてと一緒に部屋だった。

男性陣はまんざらでもなさそうだったが、女性陣は露骨に嫌そうな感じを見せた。

温泉にて…

「一つ壁の向こう側には女性陣が温泉に入ってるんですね…」

ボソッとザックスは言った。

「シーっ！…そんなこともし聞こえようものなら、あいつらまた調子に乗って嫌な態度とるぞ！…君の気持ちは十分にわかる！…ただ、声には出さな…」

「さ、さすがガラ先生だ…」

部屋にて…

やはり旅行初日ということもあってみんなテンションが上がっていた。

眠れないので、みんなで雑談することにした。

「そつえば最近ジーク先生引越したんですって？」

アリーがジークに尋ねた。

「…誰に聞いたの？」

「ロス先生から。」

「…おしゃべりロスめ!!」

「なんで2人部屋を借りたんですか？」

「い、いや別に理由はないけど…」

「ジーク、別に将来を考えることは悪いことじゃないぞ。先のことを考えて広い部屋にしたんだろ？」

「ま…まあ」

「じゃあ、教えてもらおうか。誰との将来を考えたのかを！」

「ガラ先生…誘導上手い…」

ジークが返答に困りチラッとオータムを見ると真っ赤な顔をしてうつむいていた。

アリーは苛めるのはこの辺でいいかと思い、次はザックスに聞いた。

「ザックス先生は将来はどうするつもりです？」

「えっ？」

アリーの攻撃は夜遅くまで続けられた。

技術交流（４）

長い道のりを経て、やっとライラ診療所へ到着した。

所長のライラがジークに挨拶してきた。

「本日はこんなところまで足を運んでくださってありがとうございます。」「
ます。」

「いえ、こちらこそお招きいただきありがとうございます。」

「伝説のジーク先生方の治療が見れるとあってみんな非常に張り切っています。どうぞ、お手柔らかに。」

「いえいえ、そんな…」

オータムがイライラして耳元でささやいた。

「ジーク先生！！何デレデレしてるんですか！？」

「あ、挨拶してただけだろ！」

メンバーは中に案内された。

診療所の中は、さすがに国内最高と評されるだけの素晴らしい設備だった。

医者の数も２４０人とジーク達の３０倍いた。

ライラは説明した。

「今は魔術医師不足ですが、これから魔術医師をどんどん増やしていくつもりです。学校を１校建設して、弟子をそこで１０００人教えていますの…」

「ほえー！！！！凄いですねー！」

オータムがまたジークに囁いた。

「ジーク先生！！何間の抜けた顔してるんですか！？」

「でも、実際すごいじゃん。」

「…ばか…」

ライラは一人の魔術医の前で立ち止まって言った。

「この方はラシック先生といって、非常に優秀な魔術医です。デモンストレーションとして治療してもらいましょう…」

ラシックは軽症の火傷の患者に呪文を唱えた。

すると、火傷の後は完全に消えて回復した。

ジーク達魔術医師らは拍手した。

ラシックが挑戦するまなざしで言った。

「伝説のジーク先生の治療を是非勉強させて頂きたいのですが…」
ライラも便乗して言った。

「そうですね。是非!!」

ジークは照れながらも受けた。

「ラシック先生の治療は丁寧で非常によかったよ。ただ、少し時間がかかり過ぎかもなあ…」

ライラとラシックはその発言に非常に驚いた。

ラシックは治療のスピードが自慢の魔術医師で『サブレットラシック』と異名を取っていたからだ。（顔が若干馬面なのもあったが）
今の治療も5分と掛からなかった。

ライラは同じような症状の患者を一人連れてきた。

ジークはその火傷を見るや否や、呪文を囁きながら指でなぞった。
完全に傷を治すのに5秒と掛からなかった。

ライラとラシックは愕然としながらジークを見た。

ジークは照れながら言った。

「まあ…時間が短ければいいってもんでもないが、大きな合戦なんかがあると、スピード勝負になってくるからね。ラシック先生もスピードさえ速くなれば優秀な魔術医師になれるよ。」

「あ、ありがとうございます。」

ラシックはそう言いながらも非常にショックを受けていた。

技術交流（5）

ライラ診療所にジーク達が来て2日が経った。

ライラもライラ診療所の魔術医師もジークのみ特別な魔術医師で、他のメンバーは並のレベルだろうと思っていた。

なので、ジークの元にライラ診療所トップレベルの魔術医師を派遣し、見学させた。

そして、優秀な魔術医師には他のメンバーを組ませて治療に当たらせた。

ライラはなんで助手までついてくるのかと不思議に思ったが、何もやらせないわけにはいかなかったので並の魔術医師と組ませた。

ライラはジークの治療を改めてみたがやはり凄かった。

重症患者はライラ診療所トップレベルの魔術医師でも1時間はかかるのに、

ジークはそれを2分からずに治してしまう。

それを1日で何千回と詠唱できるといふのだから、正に伝説の魔術医師と呼ぶしかなかった。

ライラはショックを受けて途方に暮れていたが、

他のところに回らないわけにはいかなかったので他の場所の様子も見に行った。

「えーと、ザックス先生が治療している場所は…ここか。」

ライラはザックスが治療している部屋に入った。

ライラはそこで度胆を抜かれた。

ジークとほぼ変わらないレベルでザックスが治療している…

ライラ診療所の魔術医師は愕然とした表情でそれを見ていた。

ライラはザックスに思わず尋ねた。

「ザックス先生…あなた一体…」

「実は医療先進国最高研究所副所長だったんですよ！」

ザックスはこの手の質問には慣れているのでサラッと答えた。

「えっあの高名な……」

ライラもそばにいた魔術医師もただただ驚嘆するしかなかった。

ライラはジークを見た時以上にショックを受けたが、

もうこれ以上逸材はいないだろうと願いながらガラを探した。

そして、脆くもライラの願望が崩れ去った。

ガラもまた、ザックス、ジークと同様のレベルで治療を行っていた。

ライラはショックでフラフラした。

こうも違うものかと……なんで北と南なだけなのに、

こんなに医療魔術のレベルがかけ離れているのかと……

しかし、もう一つ嫌な予感がした……というより疑問が湧いた。

あの助手たちも凄いのだろうか……と

ライラはフラフラしながら助手の仕事を見に行くと、

魔術医師たちは助手のおかげで普段の10倍の速さの回転率で患者の治療ができていた。

軽傷であれば、助手たちが治してしまい、そこでお金をもらい素早く帰らしていた。

もともと並の魔術医師たちには重症患者を任せていないので、ほとんど全ての患者が助手の治療だけで終わっていた。

しかし、助手は並の魔術医師を遊ばせるわけにはいかないので、適度に軽症患者を回していた。

ライラは自分の診療所のレベルが全然低いことにショックを受けて、
凄く恥ずかしく感じた。

技術交流（6）

ジーク達が来て一週間が経った。

ジーク達の余りの凄さにライラは自信喪失してしまった。

ライラは途方に暮れて診療所の屋上で空を見ていた。

オータムがライラの様子がおかしいことに気づき、屋上に行きライラの場所へ行った。

オータムがライラに話しかけた。

「どーしたんですか？…元氣ないですけど…」

「今まで私がやって来た事って…なんだったんでしょうね…」

「何がですか？」

「私の診療所の人たちは、あなたたちの凄さに圧倒されていますよ。このレベルがどれだけ低いのかを感じ取ってるはずです。私だっ
て一緒です。」

「なんだ…そんなことですか…」

「そんなことってどういうことですか!？」

「そんなことじゃないですか!! 私たちがどれだけ頑張ってきたの
かも知らないで…」

「…どういうことですか？」

「私たちは魔術医師がジーク先生が1人になってしまって、助手の
3人でそれを支えてきたんですよ!! 何回もライラ診療所に助けの
手紙を出しましたよ!! でも、あなた方は一回として助けてくれな
かったじゃないですか!! その時、ジーク先生がどういう生活して
たと思います!! 一日睡眠が2時間眠ればいい…そんな時が何年
も続いて…そんな地獄に比べたらあなたが思っていることなんて取
るに足りないことですよ!!」

「…」

「やっと助けしてくれるメンバーが集まって、弟子だって育ち始めて
る…でもそれはジーク先生が挫けずに頑張ってきた結果なんです!

！あなたたちもジーク先生の1%でいいからもつともつと頑張りなさいよ！！」

オータムの怒鳴り声を聞いてジークが上がってきた。

オータムはジークを見つけると怒りながら去って行った。

ジークはライラの元に言って謝った。

「うちのオータムがどうもすいません。」

「いえ…あの時はすいませんでした。」

「あの時？」

「私…実はオータムさんから手紙貰ってたんですよ。何人か…応援を派遣してほしいですって…私その時派遣しなかったんです。私たちのところだつて余裕ないからって…でも非常に苦労されたって話で聞きました。」

「ああ…しょうがないですよ…オータムたちはあの時そーやって頑張ってくれてたんですね…ところでどうですかうちのメンバーは？」
「本当に素晴らしいです…私のやって来たことがまるでダメだっと思っぐらいい…」

「…でも、私はあなたのことを尊敬していますけどね…」

「えっ？」

「…うちのメンバーはほとんどが才能に溢れています。でも、あなたは並の魔術医師だったでしょ？それでここまで立派な診療所にしたなんて信じられません。」

「…ありがとうございます。」

技術交流（7）

ジーク達がライラ診療所に行ってる間、ライラ診療所からも魔術医師が来ていた。

ロスが代表で出迎えた。

8人くらいの魔術医師が来た。

ロスが代表者に挨拶した。

「どうも、ロスと言います。よろしく願います。至らないところがあつたらなんでも行つて下さい。」

「こちらこそ…代表者のノックスと言います。今日からお世話になります。」

非常に丁寧にあいさつしてくれたが、まなざしは俺の方が優秀だと言わんばかりだった。

ロスは早速ノックスたちを診療所の中に案内した。

ノックスたちは診療所が患者であふれている様子を見て、だらしない診療所だと思つたらしかった。

ノックスがロスに言った。

「失礼ですが、もう少し診療所内をしっかりと見た方がいいのでは？ 一人一人が効率よく動かないといい仕事はできませんよ。」

「…そうですね…確かに…しかし、一人一人の負担が大きくてどうしても行き届かなくなつてしまひまして…」

ノックスは得意げに言った。

「そうやって自分たちの実力のなさを環境のせいにしてるからダメなんだと思いますよ…！」

ロスはシュンとして言った。

「…そうですね…気を付けます。」

ノックスは自分の実力に絶対の自信を持っていた。

ライラ診療所でトップクラスの実力で次期所長と噂されていた。

ただ、この診療所の評判が凄くいいのでノックスはいつも腹立たし

く感じていた。

なんでこんな患者があふれている診療所の評判がいいんだろう

そう思い、ノックスは自分の实力を見せてやろうと思った。

ノックスはロスに言った。

「早速、治療を見せて頂きたいのですが!!」

「そうですね…じゃあ、モズ先生の治療を見てもらいましょう。」

ロスとノックスたちをモズの元へ連れて行った。

モズはいつものメンバーが不在な分疲れていたが、通常通り治療を行っていた。

モズの通常の治療はノックスたちに自信を失わせるには十分な手際だった。

ノックスはたまらず尋ねた。

「…あなたはこの診療所で一番の実力なのですか？」

「いやいや、私はこの診療所の魔術医師では一番ダメですよ…」

「…」

「今日はノックスさんらの治療を見て勉強させてもらいます。じゃあ、次の患者から交代しますのでよろしくお願いします。」

ノックスの顔は真っ赤になった。

絵本の館

ライラ診療所でお世話になって1週間が経った。

ジーク達は休みをもらったので、各自自由に過ごした。

助手のリースはこの地方に来たら、どうしても行きたい場所があった。

その場所はどうしても知られなくなかったため、

みんなにばれないようにコッソリと診療所を抜け出した。

リースは2時間かけて目的地へ着いた。

その場所とは「絵本の館」だった。

リースは辺りを見回して人がいないことを確認すると店に入り、目をキラキラさせながら絵本を眺めた。

リースは以前絵本を猛烈にバカにしたことがある。

「絵本が好きって大人のたまにいるじゃない？あれって私どうなのかなって思うー！！だって別に絵本なんて子供が読むもので何可愛い子ぶってんのって思っちゃうー！！」

そうみんなの前で公言していたリースだったが、

その2か月後あるきっかけで読んだ絵本で感動して号泣した。

それ以来絵本の虜になったが、みんなにはそのことを言えずにいた。ボーイフレンドのザックスにも内緒にした。

この「絵本の館」は絵本界では有名な店でここに来るなら絶対訪れたい場所だった。

リースが絵本に夢中になっていると、ジークとオータムが店に入ってくるのが見えた。

リースは見つかると思いパニックになった。

どこか隠れるところを必死に探す、見つからない。

結局ソファの下へ潜り込んだ。

ジークとオータムはそのソファ付近で絵本を探して、絵本を見つけるとそのソファに座った。

ええー！！この二人つきあつてんの！？

ソファーの下で焦りながらもリースは野次馬根性丸出した。その後、キスとかいった燃える展開はなかったが、なんか二人はいいムードだった。

み、みんなに言いふらしたい

おしゃべりなリースは凄く思った。

だが…だが…「絵本の館」に言ったことがばれてしまう。

その葛藤と戦っているうちに眠ってしまった。

夕方そうじていた店員がソファーの下を掃除しようと下をのぞくと、

そこにはリースが寝ていたので店員は腰を抜かしたという…

絵本の館（裏話）

リースが絵本の館に行っていた時、実は裏話があった。

ジーク達が休みをもらう前日、ジークがオータムに話しかけた。

「オータム…あのさ、明日休みらしいんだけど…」

「えっ！…やったあ！！」

「あのさ…どっか遊びに行かない？」

「えっ…」

「いや、予定があるんだったら全然いいんだけど…」

「…『絵本の館』って知ってます？」

「『絵本の館』？知らないけど…」

「じゃあ…一緒に行ってみませんか？」

「お、おう。行こうか！！」

こうして二人は絵本の館に行くことになった。

絵本の館付近にて…

二人が絵本の館の近くまで来た。

ガラス越しから中が見えた。

すると、リースが中に居た。

二人は反射的に隠れたが、オータムは隠れながらも笑っていた。

「リースは前絵本のことバカにしまくってたんですよ。なのに、絵本にはまったんですね。」

「そーなんだ。ちょっと行ってからかってやるか…」

絵本の館のドアを開け、リースの方を見ると、そこには誰もいなかった。

しかし、ソファの下から人影が見えた。

二人は笑いをこらえながら、座りコソコソ話で話した。

「そんなにばれたくないのかな？」

「そうかもしれませんね…めっちゃめっちゃ絵本のこと否定してしまいたから…」

「ちよつと可哀想な気もするから気づかないふりしてやるか！」

「そうですね。じゃあ、楽しみましょうか!!」

そうして二人は楽しい時間を過ごした。

ノイズ

ライラ診療所での技術交流も終盤に近づいた。

診療中、ライラがジークに話しかけた。

「…実は一つお願いがありました。」

「なんですか？」

「…私の息子のノイズを指導してほしくて…才能はあるんですが、最近はず調に乗ってまして」

「息子さんがいらっしゃったんですか！どうぞ連れてきてください。」

「ライラはホツとした表情をして、助手にノイズを連れてくるように頼んだ。」

1時間後…

助手に両腕を捕まえられて一人の男がジークの前へ来た。

ライラはその男の頭をつかみ強引に下げさせた。

「息子のノイズと言います。」

ノイズはわめきながら言った。

「ちくしょう。だましてこんな所に連れてきやがって！！俺はもうこんな所に学ぶことなんてないぞ！！」

ジークはその男を見て、軽くお辞儀をすると構わず治療を続けた。

その治療を見て、ノイズは言った。

「なんだい。伝説の魔術医師と聞いたからどんなに凄い医者かと思えばこんなもんか！！」

そう言つてノイズはジークと患者の間に無理やり入って患者を治療した。

ノイズはジークと同様の見事な治療を見せた。

ジークはその様子をしばらく見守りライラに言った。

「見事な治療じゃないですか？特に指導することはありませんけど」

だった。

24時間経過…

ノイズは魔力の限界が来て、どうにも魔法が使えなくなった。

「ノイズ君。2時間ほど休みなさい。」

ジークはそう言いながら治療を続けた。

ジークはノイズの3倍の速さで治療しながら、まだまだ余裕だった。

ノイズは打ちのめされながら仮眠についた。

結局2日で5000人の治療が終わった。

ジーク達は3人で3000人を請け負い実力をライラ診療所に見せつけた。

帰り道

とうとう技術交流も終わり、帰る時が来た。

所長のライラに一つ頼まれたことがあった。

「ジーク先生に一つ頼みたいことがあります。息子のノイズを一人前の魔術医師にしてやって欲しいのです。」

「うちは来る者拒まずですけど…特別扱いはしませんよ？本人が諦めたらそれまでですし…」

「構いません。ジーク先生の所に預けて、自分より実力が上の人たちの前で揉まれてほしいのです。」

「…わかりました。」

帰りの道で…

馬車の中で、ジークがまたもゲームを提案した。

「20の質問ゲーム!!」

みんな5000人の患者を相手にして疲れ果てている中、ジークのみ元気だった。

どうやらみんなで旅行するのが楽しみで仕方ないらしい…

すぐに、みんなが不平不満ばかり言っつてすぐ中止になった。

ジークがいじけていると、オータムが仕方なさそうに言った。

「じゃあ、やりますか!!」

オータムが一言声を掛けると、みんなも仕方なさそうにやりだした。ジークは再び元気を取り戻した。

結局、20の質問ゲームはすぐに終わったが、話題は新しく入ったノイズに集中した。

「ノイズの趣味は？」

アリーがそう質問すると、ノイズは面倒くさそうに言った。

「それ聞いてどうすんの？」

その言葉に馬車内がシーンとなった。

アリーがシュンとしているので、オータムが怒って言った。

「ちよつとそんな言い方ないんじゃない？」

「俺は馬車内は静かに過ごしたいんだよ！！大体仕事を一緒にやる
ってだけでなんでプライベートまで話さなきゃいけないんだよ！！
もう放つておいてくれよ！！」

そう言つて、ノイズは毛布を頭からかぶった。

ジークは黙つてそれを見ていたが、すぐにノイズの毛布をはぎ取つて言った。

「駄目だ！！一緒に20の質問ゲームをやろう！！」

「嫌だつて言つてるだろ！！」

「所長の俺の命令を聞けないならライラ診療所に帰ってもらうぞ！
！なんせ俺は所長だからな！！」

「…くそっ」

ノイズは渋々20の質問ゲームをジークとやった。

全然盛り上がらなかったが…

帰宅

とうとうジーク達は診療所に帰ってきた。

ロス、イリア、モズがゲツソリした顔で出迎えた。

「お帰り！！さすがに3人はつらかったよ…」

「ありがとうな！！こっちは色々勉強になったし、楽しかったよ。

あと、一人紹介したい弟子がいるんだ。」

ジークはみんなを集めてノイズの自己紹介を始めた。

「ライラ診療所から来たノイズ君だ。みんなよろしく頼む。」

みんなが拍手したが、ノイズは何も言わずにどこかに行ってしまった。

その態度にみんな困惑した。

ジークが続けて話した。

「ちょっと…気難しいやつかもしれないがまあみんな仲良くな！」

そう言つて、ジークは苦笑いをした。

かくしてノイズの診療がスタートした。

スタート当初から診療態度がめちゃくちゃ悪かった。

ノイズはジークにいきなり怒鳴り込んできた。

「なんで俺が軽傷患者の診療からなんだよ！！重症患者治療させろよ！！」

「いきなり重症患者から治療したいのか？」

「別にできるんだからいいだろ！！あつちじゃ1番の実力なんだから！！」

「じゃあ…ロス先生の横で治療して。」

「…いい気になるなよ！！お前らなんて絶対に追い抜いてやるからな！！」

そう言つて出ていった。

ノイズはロスの横に行き、治療を始めた。

ロスがノイズに話しかけた。

「どうだい…うちの診療所は？」

「さ・い・あ・く!!」

「そ…そう」

ロスもシユンとさせられた。

4時間後…

ノイズは治療を急いでやっていた。

スピードを意識していたので、ミスを連発した。

そのたびにロスはフローして代わりに治療した。

これが、ノイズにとっては屈辱だった。

ライラ診療所ではノイズに逆らうものなどいなかった。

ノイズは悔しそうに治療を続けた。

ノイズの恋

今日は、待ちに待った給料日。

オータムがみんなに給料明細を渡した。

ノイズが給料明細を貰うと、その額に非常に驚いた。

「な、何だこの給料は！！めちゃくちゃ多いじゃねーか！！」

「フフフ…給料には自信を持っています。まあ、それだけ激務だからね…」

「弟子の俺がこの額ってことはみんなはそれ以上に多く貰ってるってこと？」

付近にいた魔術医師たちが一斉にさーっと逃げ出した。

ノイズはもつと実力をつけて一人前になることを誓った。

ノイズは早速町に繰り出した。

バラがそこでノイズを見つけて声を掛けた。

「おう！！お前どこ行くんのだ？」

「いや、別に…金もあるし何か買おうかなと。」

「じゃあちよつと付き合え！！」

ノイズは無理やりパブに連れて行かれた。

「まあ、バラ先生…今日も来てくださっただんですか？」

パブの店員が声を掛けた。

「まあな…今日は財布もあることだし、みんな俺のおごりだ！！遠慮なくやってくれ！！」

パブ中のみんなから歓声が沸き、注文が殺到しだした。

バラにはきれいな女性が横に2人つき、宝石などもねだられていた。ノイズは緊張しながら座っていたが、

バラの連れだと知られるとききれいな女性が1人ノイズの横に来た。

その女性はリアといった。

その女性を見た瞬間ノイズの頭の中に雷が落ちた。

ノイズの手は震え始め、リアの顔を見ることができなくなった。リアはその態度に嫌われているかと思い、

頑張って話しかけたがノイズがろくに返事もしないので言った。

「ごめん…私が横じゃ嫌よね。他の人連れてくるから…」

ノイズは慌てて言った。

「いや!!…君で…君でいいよ。」

ノイズの恋(2)

ノイズはパブの店員リアと出会って以来、毎週そこへ通った。

本当は毎日でもそこへ通いたかったが、バラが週に1回しか行かなかったのでその時には絶対について行かなかった。

毎回行くたびにリアを指名した。

でも、緊張してろくに話すこともできなかった。

リアもノイズの気持ちに気づいていた。

リアはさりげなく自分が凄くお金がないこと、

病気の弟がいて、この仕事をやりだしたことを言った。

そうしたら、ノイズはチップとして凄くたくさんのお金をリアにプレゼントした。

リアはノイズが凄くお金持ちだと勘違いした。

リアはノイズにハグして喜びを表現した。

リアはお金が全然足りないこともさりげなくノイズに伝えた。その手段は巧妙でパブのママにそのことは話させた。

ただ、ノイズはリアに全てのお金をプレゼントしてしまった。もう何もあげられるお金がない…

バラのおごりなので、パブに来ることは可能である。

弟子から一人前に昇格したら給料が跳ね上がるらしいとうわさで聞いた。

確かに、ガラはノイズが使えきれないほどの金を捨てるように使っていた。

それからというもの、ノイズはめちゃくちゃ頑張った。

嫌味な性格は治らなかったが、今まで真面目に勉強してこなかったことを重点的に勉強し直した。

今度の魔術医師の試験にはどうしても受かりたくて、

仕事が終わった後もジークやロスに医療魔術のことを聞きに言った。

1か月後…

「いよいよ来月だな」

ジークがロスに呟いた。

「試験がつてこと？誰か期待できる人はいるの？」

「チャ以来一人も出てないけど、今回は一人いるよ。」

「誰？」

「ノイズかな…」

「あいつかぁ。そういえば最近凄く頑張ってるな…」

「負けん気が強い奴はいいね。ふとしたキツカケでぐいぐい実力が
のびるから。」

「誰かに貢いでるって噂だけど…」

「いやぁ…若いねえ!!」

「俺らと同じ年ぐらいだけどね…」

一番死にそうになった日

イリアとジークがたまたま並んで治療していた。

イリアがジークの実力を見て言った。

「いつみても凄すぎますよね…ミスとかしたことあるんですか？」

「…一回あるよ。」

「どんな時ですか？」

「内緒。」

「一番辛かったときは？」

「うーん…あの時かな…4年前患者が一万人来た時に魔術医師は俺一人、助手は8人しかいなくて」

「それ…ちよつと大げさに言ってますよね？」

「大げさなもんか！！死にそうになっただから！！本当に…」

4年前：

「ジーク先生！！患者が待つてますよ！！寝るな　　！！！！」

「寝かせてください！！もうもうもう無理です！！」

「テメーこのやろー！！！！テメー　がやんねーと何時までたつても終わらねーだろーがー！！いいから早くやれ！！」

「ぐあー！！！！かいうはすぎいかじえでがしょういんくり！！！！」

「ジーク先生が壊れたぞ！！例の奴もつてこい！！」

現在：

ジークは思い出しただけでも身震いした。

「テメーって叫んでた人はだれなんですか？」

「…言わない…言ったら怒られるもん」

「一万人も治療できるものなんですね…」

「寿命が10年は縮まったけどね…」

「ところで、例の奴ってなんですか？」

「恐ろしい薬：激痛と引き換えに魔力と体力を戻す。でも、想像を絶するほど痛いし、10日間は悪夢にうなされる…」

「そんな危ないもの打てる助手の人はいるんですか？」

「一人ね…」

「誰ですか？」

「言わない…おこられるもん」

バラの過去

バラはいつも浴びるように酒を飲んでいる。

その日もバラはパブへ行き、店の酒をすべて注文した。

3時間が経ち、5時間が経ち……

「んせい！バラ先生！！起きて下さい！！」

「ん……もう朝か……」

「早くいかないと遅刻しますよ！！」

「わかって……いてて……どうも頭が痛いな」

「飲みすぎですよ！！明らかに！！体壊しちゃっても知らないから」

「パブの店員が酒飲みすぎて怒るかなあ……」

「心配して言ってるんでしょ！！どうせ私が介抱するはめになるんだから……」

「わかったよ。マリ」

「俺じゃダメか？マリ」

「ダメじゃないけど……」

「ダメじゃないけどなんだ？」

「あなたは……ずっと変わらないでしょ？そんなあなたが好きよ。でも……」

「……………」

「このままがいいの。きつとこのままで……………」

「マリ……俺は決めたよ。」

「何を決めたの？」

「酒を今日で辞める。一生な。」

「えっ」

「女遊びもしない。」

「…」

「俺は人生において2番目に大切なものと3番目に大切なものを諦める。」

「…」

「そして、マリ……1番大切なお前を手に入れたんだ」

「……何で眠ったまんまなんだ？」

「…」

「今日は俺たちの結婚式じゃないか……何で……もう一度笑ってくれよ……」

「…」

「らせんせい！バラ先生！！」

パプのママに起こされた。

「こんな所で寝てないであっちで飲みましようよ！」

「ああ…そうだな…」

「どんな夢見たの？笑ったり泣いたりしてたけど…」

「…なんでもない」

外国語を学ぼう

「ジーク先生、何やってるんですか？」

「サクロウ。」

「何言ってるんですか？」

「バカだなーオータムは。アステカ語で、勉強って意味だよ。」

「ば…そんなのわかるわけないじゃないですか！！」

「まあ、そうだな。実は患者の勧めで外国語を勉強しててね。」

「とうとうそこまで来ましたか…」

「は？」

「人は暇になると外国語を勉強するんですよ！」

「ち、違うよ！！全国にいる外国語を勉強している人に謝れ！！」

「問答無用！！患者数増やしますから！！」

「そ、そんなー」

オータムの厳しい言葉はあったが、ジークは結構頑張ってアステカ語を勉強した。

1日1時間は勉強して、休日の1日は4時間勉強して家庭教師までつけた。

ジークの話では、なんでもいいから医療魔術以外のことを勉強したかったらしい。

1か月後…

ちょうど、アステカ人の患者がやって来た。

オータムはちょうど良いと思いジークにその患者を診させた。

患者はアステカ語しか話せないようでこう話した。

「ハトラエ タラサファイ」

ジークは緊張しながら言った。

「ハトラエ タラサファイ」

患者はアステカ語がわかると思ったのか早口で話した。

「フトイルヨイン ジャンガブ リヨウイジクオモンデガルコ」
ジークは全く聞き取れなかった。

しかし、オータムはジークがアステカ語を話せると思っている。
かつこ悪いところは見せたくなかった。

オータムはジークに尋ねた。

「何て言ってるんですか？」

「その… お金がないんだけど、どうしたらいいのかっていってるんだ…けど」

「分割ならいいって言って下さい。」

「わ、わかった。ガタラジウナイ」

「ハツリユウジノ！！フジンンガ！！」

「ハ、アハウヨインジヨコモジュ！！」

オータムは再度ジークに聞いた。

「解決しましたか？」

「うん… な、なんとかな。」

本当は意味のない単語を言っていただけだった。

とりあえず、ジークは患者を治して受付にお金を払って患者を早々に帰らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367n/>

魔術医師 ジーク

2010年11月3日06時30分発行